

俳句雑誌

# 水明

2025 1月号

令和六年十二月二十日発行（毎月一日発行）通巻第九十八巻第一号



新年明けまして

おめでとうございます

本年もよろしく願います

令和七年新春

主宰 山本鬼之介

---

「水明」は、本年九月に創刊九十五周年を迎えますが、この慶事を発条に、待望の創刊百周年へ邁進してまいります。その日の歓びを実現するために、皆様の更なるご支援とご協力をお願いし、新年のご挨拶といたします。

今月の巻頭句

季音雪

ひつそりと城下を落つる鮎の影

五明 昇

季音月

恋をしへ鳥舞のつやめく潦

梅澤佐江

季音花

生きては般若死して観音白芙蓉

染谷風子

水明集

村里に秋の灯ひとつまた一つ

反町 修

鼓笛集

一夜明けすべては過去に秋の風

元田亮一

山紫集

鳴くほどに闇のととのふ虫時雨

梅澤佐江

# 水明

令和7年  
1月号

今月の巻頭句

ひと葉 (作品)

山本鬼之介

今月のかな女

6

九五周年記念特別作品募集

7

実る (近詠)

茂木和子

8

庭の花づくし 晩秋 (近詠)

永野史代

9

煌星 雪欄作家近詠鑑賞

正木萬蝶

10

ゆずり葉 季音月評

檜鼻ことは

12

季音「雪」 (同人作品)

五明昇	境	延昭
椎野美代子	ほか	ほか

14

季音「月」 (同人作品)

梅澤佐江	森川義子
大場順子	ほか

20

季音「花」 (同人作品)

染谷風子	笹本啓子
保坂翔太	ほか

25

鼓笛賞・山紫賞作家の頁

岡田宣子・越田栄子

30

現代俳句鑑賞

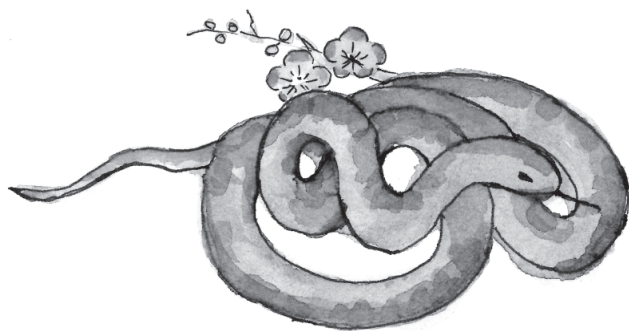
網野月を

32

『水明誌』を繙く

長井寛

34



# 水明集

反町 修  
飯田 忠男  
岡田 宣子  
ほか

作品鑑賞

山本鬼之介

48

水琴窟（水明集十月号鑑賞）

池田雅夫

52

俳誌望見

染谷風子

35

句集喝采

菅原卓郎

36

鼓笛集

54

山紫集

58

第八回水明塾を終えて

青木鶴城

57

例会報、各地句会報

64・67

水明俳句会指導者および幹事の会のお知らせ

72

新珠賞作品募集

74

水明忌・春の吟行会・全国大会のお知らせ

74・75

運営組織・年間行事・教室案内

76

風声・発展基金御礼

82

後記

題字…長谷川かな女 表紙…内田恵子 カット…福田千春

---

---

# ひと葉

山本鬼之介

奮ひ立つ気象予報士今朝の冬

小春日やいざ出陣の東西屋

村会は満場一致冬の暮

---

麗しき木の葉をひろふ隠れ道

「くまモン」の表敬受くる檻の熊

笠に受難がさては女難か冬ともし

伝統の一戦ここに空つ風

記念日に贈るマフラー―渋好み

《今月のかな女》

羽子板の重きが嬉し突かて立つ

(句集『龍膽』)

長谷川かな女

かな女の最も知られた代表作である。かな女の少女時代に、毎年暮に某家から歌舞伎役者の似顔絵の押絵をあしらった豪華な羽子板が贈られてきた。かな女は、正月にその羽子板をずらりと並べて楽しんで、その中の一つを抱えて門前に立ち、近所の人達の羽根突きを眺めていた。正月の晴れ着姿のかな女が、お澄ましして得意げに立っている姿と、当時の下町の風情が見事に映し出された作品である。

(鬼之介・註)



# 水明創刊 95 周年 記念特別作品募集

記念全国大会・記念祝賀会のご案内の通り、水明創刊 95 周年を記念して、下記の要領で俳句・エッセイ・評論の各部門の特別作品を募集いたします。

選考委員以外は何方でも応募できますので、奮ってご応募下さい。  
なお、受賞者の表彰は令和 7 年 9 月 28 日の記念全国大会にて行います。

## 応募要領

- 【応募資格】** 選考委員を除く全ての水明会員
- 【応募部門】** ①俳句作品：30 句（応募用紙を発行所迄ご請求ください）  
②エッセイ：1 篇（400 字詰原稿用紙 5～10 枚）  
③評 論：1 篇（400 字詰原稿用紙 15～20 枚）
- ◆①は応募用紙を使用。②③はタテ書き B4 判 400 字詰原稿用紙を使用する
  - ◆文字は楷書で丁寧に記す（鉛筆書きは不可、黒ペンを使用）ワープロ、パソコンによる原稿も可
  - ◆いずれも未発表作品に限る
  - ◆最初のページの 1 行目に表題（タイトル）と氏名（俳号）を明記する
  - ◆複数部門への応募も可
- 【応募締切】** 令和 7 年 5 月 25 日（日）  
（令和 7 年 4 月 1 日から受付開始）
- 【送 付 先】** 〒330-0064  
さいたま市浦和区岸町 4-10-21 水明発行所宛  
※「記念特別作品」と朱書する
- 【選考委員】** 主宰・副主宰・編集長・石山かつ子・石井喜恵  
◆選考委員各自の選考結果を基に厳正に協議し、受賞者を決定します
- 【授 賞】** 俳句・エッセイ・評論各部門に授賞します  
正賞 1 名：賞状と副賞 5 万円  
（但し、受賞に値する作品がない場合には該当なし）  
準賞若干名：賞状と副賞 2 万円  
（但し、受賞に値する作品がない場合には該当なし）

### ◎ご質問・お問い合わせ

実行委員長 網野月を（電話 080-7580-0208）へ  
願います

水明創刊 95 周年記念事業 実行委員会

# 実る

茂木和子

蔓引けど引けども宙の鳥瓜  
瓢の実のひようひようと鳴く父こひし  
万年青の実熟れて私を振り向かす  
御湿りの後の眼福冬珊瑚  
こんな日は語らひつきぬ実千両  
葉隠りの万両言の葉の重し

今年夏がいつまでも居据っていたので、秋の訪れは遅かった。が自然の歩みは確かです。秋らしい日が続く様になった。山の紅葉や生物は里山へ。鳥は美しく鳴き立て花は実を結び実感としての秋を味わって居る昨今である。

犬の散歩で知り合った犬友との会話。苗字も名前も知らないのに押し活の話にまで盛り上げる楽しさ、こんな身近にある平和な生活に感謝している。今日此の頃である。

# 庭の花づくし 晩秋

永野史代

灯さされて仏間の障子仄暗し  
認知症かしら真紅の木瓜の返り花  
教会のオルガン聞こゆ雁来紅  
誰を待てり首を伸ばして石路の花  
秋明菊の白ひらひらと揺れてをり  
柿熟れて夕陽は焦げる焦げるかな  
影もなし小さき冬の薔薇咲いて

毎朝仏間に正座して拝んだ後、短冊を誦んじるのが日常。初冬からは素敵な句が多い、

橋立の若布の束に雪六片<sup>〳</sup> かな女  
犬吠ゆる冬山彦になりたくて<sup>〳</sup>

雪降れば雪の面の天狗かな<sup>〳</sup> 紗一  
大根煮て昔のやうに抱かれけり<sup>〳</sup> 秋子

かまくらを出入りの神が燭揺らす<sup>〳</sup> 明世  
絶滅のかの狼を連れ歩く<sup>〳</sup> 小泉

他に水明に係わる懐かしい人々の句が浮かぶ。  
三橋敏雄  
〔敬称略〕

# 煌星

季音雪欄作家近詠鑑賞

正木萬蝶

◇田舎暮し（九月号）

町野広子

◇神戸ポートタワー（九月号）

森本早苗

月餅の美味さに目覚め梅雨一日  
梅雨曇鴉がやけに騒がしい

中国で本来は中秋節に頂く月餅だが日本では一年中見掛けも趣向を凝らして進化している。一般的にはクルミや松の実、胡麻等が漉し餡と共に薄い皮に包まれている。油分もあり高カロリーな食べ物だ。梅雨の手持無沙汰で頂いているととんでもない事になってしまう。ジャスミン茶で程々に。

この時季は子育て中で用心深く攻撃的な親鳥が騒々しい。賢く女子供を馬鹿にするとか。嘗て鴉に襲われたと伺った事がある。鳴き声が梅雨の鬱陶しさを増幅していて不気味だ。

同日の三人からの夏野菜  
気の置きぬ女友達暑気払ひ  
自家梅酒グラスを満たす琥珀色

この異常気象の物価高に羨ましい限りだ。新鮮で艶やかな色とりどりの野菜達。一番の贅沢。「この野菜で今夜、暑気払いしない？ 梅酒もあるし、あの人とあの人も呼ぼう！」この梅酒は多分二、三年前の物？ 今年の梅酒は出番を待って未だ眠っている。面倒見が良く穏やかな作者の周りには何時も人が寄ってくる。句会でも優しさ頼もしさで我々を引っ張って下さる。句会の心地よさは水明随一であろう。

梅雨明や甘き潮の香光る波  
みなとまつりミストシャワーの弾け飛ぶ  
「鉄塔の美女」のウエスト黒揚羽

横浜生まれとしては非常に親近感を覚える街だ。梅雨明けとは云えまだ少し湿り気のある空気。鼻腔を擦る柔らかな潮の香を甘いと感じたのだろうか。視覚と嗅覚の梅雨明けだ。猛暑酷暑のミストシャワーは本当に有難い。弾け飛ぶのは歓声と笑顔と飛沫。みなとまつりの正にオアシス。去り難い。八頭身を思わせるポートタワー。人間のウエスト辺りが羨ましい程にくびれている。黒揚羽を遠近のトリックに扱ったのであろうか。色が映像を引き締めている。

星涼し 棧橋離る 安宅丸  
麒麟めくコンテナクレーン月涼し

家光の時代の御座船をモチーフにクルーズ船として運行されている安宅丸。阪神工業地帯の中核を為す神戸港の夜景。夏の月と星のコラボが海風の涼しさを強調している。現実的、人工的なクレーンを合わせた処に巧みさもある。源氏物語の舞台となる須磨、明石にも近く雅さもある。異人館、南京街やら横浜との共通点もあるが似て非なる歴史の奥行と重み、成熟したお洒落な大人の雰囲気醸す街である。

◇私と向日葵（十月号）

椎野美代子

向日葵と外車同居の農大尽  
向日葵の謁見賜りインターホン

大地にしっかりと根を張り、空に向かつて堂々の大輪を誇る。先祖代々の地で長く農業に携わり多分、ユーモアを交えて大尽と呼ばれているのであろう。広い庭先の外車はベンツであろうか。お大尽自らが運転なさるのか？ 大事な愛車ゆえ安全運転を心がけている事だろう。お大尽を守るような向日葵の擬人化を謁見という仰々しい表現に可笑しみを覚えた。

向日葵は勝気八方きなくさし  
もて余す余熱私と向日葵と  
向日葵迷路ゴツホの耳は何処ぞ何処

向日葵は勝気、ソフィア・ローレンを思った。骨ばった顎、厚い唇、大きな目が画面いっぱいに映し出される。あの映画の頃と変わらず今も世界中で戦火が絶えない。八方の表現に俳味を感じた。この映画のロケ地はウクライナだそうだ。撮影時には予測しえなかった。歴史の皮肉であろう。

向日葵を迷路に仕立てた観光地が夏になると出現する。この中に入れば逃げ場のない暑さに晒される。さすがの向日葵も長引く暑さに辟易していて元気がない様に見えるのか。ゴツホの耳もあるかも；という錯覚に陥ってしまいそうだ。群れ咲くと足元は暗い。太陽の申し子の様な花である故に秘めた悲しさや哀れさを感じた。

◇渋沢栄一誕生地（十月号）

井上燈女

秋晴や威風堂々と栄一像  
萬札の顔です栄一葱の里

失礼ながら大河ドラマで取り上げられるまで詳しい人物像を存じ上げなかった。テレビではイケメン、大好きな吉沢亮君が演じた。現実の像は安定感のある日本人そのものだ。色々な所で像にお目に掛かれるがこの深谷の記念館の像は一際似ていて流石に生地だ。垢抜けていなくてそれが堂々と見える。親しみのある顔が萬札に。深谷の大地に育まれた資本主義の父と呼ばれる栄一と葱。重みがありどっしりとした葱は栄一と重なる。

青淵の論語の里へ小鳥来る  
栄一の「論語と算盤」返り花  
煮ばうたうのとろりと甘き母の味

またまた恥ずかしながら青淵の意味を知らなかった。栄一の雅号だそう。生家の裏手の美しい水辺に因んで従兄が名付けた。渡り鳥や山から里へ下りてくる鳥達で賑わう様子を樂しむ作者。若き栄一も眺めた景色そのままであろう。

論語の精神に則り社会貢献を数多く果たした栄一。初心を忘れぬようにと論じていたのが返り花か。巧みな季語だ。山梨のほうとうとは少し違う醤油味。具材はほぼ同じだが地産地消で深谷葱は必須。「火傷しないようにね」そんな母の声も聞こえてくるようだ。

# ゆずり葉

◆季音十月

檜鼻 ことは

宿帳に書きし実名火取虫

菊池ひろこ

宿帳に本名を書くことは宿泊の際の基本的なルールですの  
で、下五に「火取虫」の季語を据え、「書きし実名」とあると、  
何やら物語を感じてしまいます。例えば「過去のトラウマか  
ら逃れるため、名前を変えて旅をすることを決意。宿帳に偽  
名を書いて宿泊しながらさまざまな人々と出会ううちに、自  
分の本当の気持ちを見つけていく物語」「目を覚ました主  
人公は自分の名前も記憶も失っています。宿帳に書かれた名  
前を手がかりに、主人公の隠された過去が明らかになってい  
く物語」など。

かくて作者は宿帳に実名を記されたのでした。秋の夜長を、  
妄想しながら楽しませていただいた一句です。

向日葵をどすんと活くる面構

椎野美代子

向日葵は夏を象徴するような花。鮮やかな明るい黄色と大

きく開いた花は、生命の力強さと活力を感じ、見ていただけ  
で元気が貰えたような気持になります。

生け花には、自由な発想を重視し個性的なアレンジメント  
を楽しむ流派や、格式を重んじ自然の形や色合いを大切にす  
る流派など、その生け方にはそれぞれの特徴があると伺いま  
す。さて、向日葵のもつ重厚感や存在感を意識して生けられ  
たのでしょうか。「どすんと活けられた」向日葵の素敵な面構  
が目には浮かぶようです。野に咲く向日葵の快活な姿をとどめ  
ながらも、落ち着きのある風情で部屋を明るくしている向日  
葵の姿を見るかのように句を読ませていただきました。

作柄の話しきりに盆の客

井上燈女

盆の時期は、稲、野菜、果物の作柄についての話が自然と  
話題になるころです。お盆は親戚や友人が集まる機会でもあ  
り、お茶を飲みながら、酒を酌み交わしながら、各々の田や  
畑の出来具合を語るのも楽しいひと時です。

稲の成長具合や実の入り具合、夏野菜の生育の状況や収穫の具合、夏の果物の味のよさ、次から次へと話題は尽きず、和気あいあいとした客間の様子が伝わってきます。

今年は例年にならない酷暑の日々が続き作柄の嘆きやぼやきも話のタネになったのかもしれないあと推察いたしました。

### 郵便局は村の中心 青田風 内田恵子

明治政府が郵便制度を始めた際、地域の名士にその業務を任せたとにより、郵便局の局舎は局長やその親族から当時の日本郵政公社が借り入れた場合が多く、特定郵便局と呼ばれるようになりました。特定郵便局は普通郵便局に比べ小規模なものが多く、郵便局全体の四分の三を占めていたと言う事です。

郵便局の近くの田では稲が青々と成長し、稲の香りを運ぶ風がまことに心地よい。そろそろ秋を迎えようかと言う田舎の景色が詠まれています。私の住まいしているような田舎では、特定郵便局であったものがほとんどで「郵便局は村の中心」という措辞がすつと心に落ち着きます。過疎化が進み利便性が遠く地方の現状ですが、地域のニーズに応じたサービスを提供し重要な役割を果たしているのが村の郵便局です。

### シャガールに会ひたくて 秋美術館 野田静香

美術館へは一人で行くときもあり、家族や友達を誘って行くときもあります。一人のときは、自分のペースで好きな作

品をゆっくり鑑賞し、作品についてじっくり考えたり、感じたりする時間を持つことが出来ます。誰かと一緒の時は、作品について話し合ったり、鑑賞後の珈琲を楽しんだりして、その経験を共有する時間を楽しむことが出来ます。

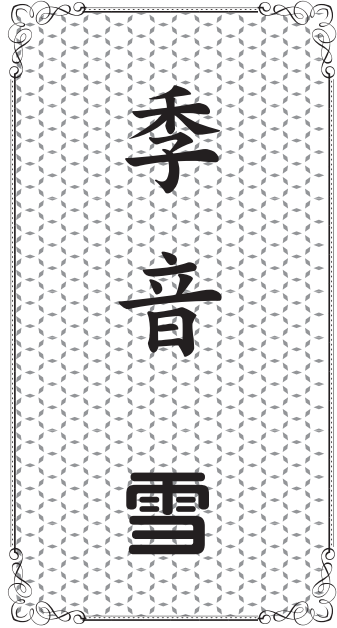
エコール・ド・パリの代表的な作家の一人、宙を舞う恋人たちや花束、動物などを幻想的で色彩豊かに描いた絵画作品で知られるシャガール。「シャガールに会ひたくて」とても好きな措辞です。楽しみな秋の美術館になりますね。

### 初秋の茶事や棗の加賀蒔絵 野村美子

森下典子氏の著書「日日是好日」。「雨の日は、雨を聴く。雪の日は、雪を見る。夏には、暑さを、冬には、身の切れるような寒さを味わう。…どんな日も、その日を思う存分に味わう。…」豊かに生きるとはこういうことなのだろうと、とても爽やかな気持ちになって読了した本です。

薄茶による初秋の茶事。加賀蒔絵の措辞から、掛物は、季節の和菓子は、この日の茶花はと、想像をめぐらし楽しませていただきました。

そして、「……毎年毎年、同じことの繰り返しなんですけれど、でも、私、最近思うんですよ。こうして毎年、同じことが出来るのが幸せなんだって」と言う「日日是好日」の武田先生のせりふを思い出したいです。



鄙の昼境延昭

清僧の頭剃り立て榎櫃の実  
山霧やべこ呼ぶ声が甲高し  
婆が剥き爺が柿干す鄙の昼  
自販機の喋り上手やうそ寒し  
役目なき男の乳首秋あはれ

プリーツスカート 椎野美代子

大甕に風ごと活くる花すすき  
胡桃だれ添へて信濃の走り蕎麦  
柿すだれ鎧ひて暮るる国境  
ひつそりと城下を落つる鮎の影  
冷やかや血管探るナースの手

曼珠沙華腦の中まで咲き移る  
プリーツスカート秋風たたみでは放つ  
なまめかし秘仏へくるり秋日傘  
溪流の風音からめ走り蕎麦  
長き夜は胎児の形に寝につかん

移ろひ五明昇



実 椿 島津初花

水引の小花を散らす日暮かな  
あの家も人住まぬらし泡立草  
干物売る男のピアス柘榴の実  
赤とんぼ覚えし九の段諳んずる  
実椿や先人句碑の前うしろ

富士の樹海 鈴木康世

朝冷や泣く児笑ふ児おどける児  
冷やかや竜の口より水奔る  
冷えびえと富士の樹海の闇深し  
冷やかや浦風とらふる風見鶏  
秋冷の里にくるくる芋水車

渡り鳥 十倉和子

雁の棹一番星を越えゆけり  
雁鳴くと直実なおざねゆかりの坊泊り  
雁渡る空港島の大硝子  
鳥渡るぼつねんと坐す方位盤  
ままごとはよそゆき言葉小鳥来る

柿 鳥羽和風

道の駅柿はきらりと艶を売る  
鈴生りを五湖に映して柿の秋  
富有柿木に生生し爪の痕  
古民家の梁黒黒と柿なます  
渋柿の一連に皺老二人

野 菊 永野史代

新蕎麦や兄と訪ねし奥信濃  
立ち喰ひの新蕎麦啜る乗換駅  
ことに濃き野菊一輪母の墓  
吹かれれば吹かるるままに野地の菊  
野菊咲くわが生涯は潔く

空の深さ 星野和葉

秋日影端よれよれの判紙本  
著者の顔浮かべ一気に読む夜長  
竹の春ささくれ立ちし冠木門  
格別に空の深さや银杏黄葉  
忌日くる银杏黄葉の最高潮

上 京 町野広子

新蕎麦や上京の日の一食目  
新蕎麦や母の命日近づきぬ  
寝入る子に涙の跡や野紺菊  
下校後の約束野菊の道を駆く  
目力は心の力野紺菊

平和賞 茂木和子

天高し「ノーマア広島」に平和賞  
秋耕の天地返しや鳥はやす  
秋耕の手足労はる仕舞風呂  
栗飯の全き栗を父に母に  
栗飯の栗を選んで頬張る子

紫苑咲く 森本早苗

牧野記念庭園界限 網野月を

今なほも追憶の日々紫苑咲く  
五島列島讚美歌黄色曼珠沙華  
山田錦の畦染め上ぐる彼岸花  
意気軒昂な友の絵手紙秋麗  
友よりの新米旨し「きぬむすめ」

きのこ狩 山中みどり

供 花 石井喜恵

柔らかき土の香やきのこ狩  
戸隠の籠編む家のきのこ汁  
ひよつこりと人現はるる茸山  
酒振つて焼く松茸の薄煙  
年毎に短き秋や茸飯

一村を呑み込むごとき薄原  
切り離す連結車輛コスモス野  
廢線の駅舎の名残り秋の蜂  
供花乾く墓石に群るる秋の蜂  
書き慣れし細字の筆や露の文

永き夜 井上燈女

日の匂ひ母の匂ひの小豆干す  
小豆叩く音ころがして納屋の土間  
秋遍路杖横抱きに祈りたる  
小面の声のくぐもる秋遍路  
人を恋ひ言葉に飢うる長き夜

捨子花 石山かつ子

望楼の影は異次元望の月  
一斉に咲いて寂しき捨子花  
浮雲は空のため息秋思なほ  
膝を抱く檻のゴリラを見て秋思  
減塩の夫を横目に秋刀魚食ぶ

雁 大橋廸代

海光はうすむらさきや雁渡る  
雁渡し異国語ぞめく天守閣  
陣羽織の龍やぎろりと雁が音に  
雁啼くや絵巻の源氏涕ぐむ  
初雁の五羽は親子ぞ湖明り

道づれ 大村節代

秋の雲やつと出来たよ大車輪  
いわし雲十八切符握りしめ  
奥信濃旅は道づれ走り蕎麦  
唐紙の唐獅子吠ゆる秋日和  
笑み浮かべ見送る内儀京の秋

生き生き 小倉倭子

薔薇の茎 菊池ひろこ

明治節のマンドリン演奏古賀メロデー  
言の葉を模索す草道吾亦紅  
十七文字の人生の詩酔芙蓉  
心音の生き生きリズム声冴ゆる  
かみなづき日の出の勢ひ胸圧す

珈琲の濾過紙の折り目秋の風  
林立の薔薇の茎抜け秋の風  
蜻蛉きて風が映りし水たまり  
末枯や相続の件落着す  
蔓引きて高みにもどす烏瓜

満月 栢尾 さく子

箸の先秋の影生む菊なます  
雪蛩共に興じし友も亡く  
どの窓もカーテン開けてある満月  
再びと泣かぬ顔上げ雁仰ぐ  
秋怒涛生きる悲しみ盛り上げて

# 季音月

恋をしへ鳥

梅澤佐江

群れ咲きて寂しき花よ曼珠沙華  
縮緬の手玉に秘むる新小豆  
八橋に爽籟を聴く城址かな  
恋をしへ鳥舞のつやめく潦  
小篁より秋思深むるますほ貝

竹の春

森川義子

竹の春新居に灯す夕あかり  
菊膾藍の器を揃へたる  
ゆつくりと山下りてくる龍田姫  
望郷の遠き日憶ふ秋の宵  
通訳のただどしくも爽やかに

冷やか

大場順子

冷やかに曜変放つ瑠璃の艶  
冷やかに受診の胸を開きけり  
猪食うて縄文の血のふつふつと  
吊されて猪の目のまだ青き  
分水嶺に濃淡わけて櫛紅葉

風爽やか

丸山マスキ

秋晴や波の穂かぶる大漁旗  
嵯峨野路や往きも帰りも竹の春  
風爽やか古地図に拾ふ屋敷跡  
秋寒し人体模型の手と脚と  
九頭龍くづりゅうの瀬音も馳走走り蕎麦

空の路

荒井俱子

沙魚の秋かつて羽田は漁師町  
子持鮎銚子も盃も笠間焼  
校庭に流るるマーチ秋うらら  
花野径少年の吹くトランペット  
小鳥来る人には見えぬ空の路

熟柿 松宮保人

酔ふ程に枝豆の殻山となり  
古びゆく十の塔婆や秋の風  
木守柿雲ひと筋にひとつなる  
背伸びして婆が熟柿を挽ぐ真顔  
愛猫の膝に來ない日夜寒し

鳥渡る 高島寛治

悔い少し引き摺るけふや秋寒し  
秩父路の風に戦ぐや竹の春  
秋晴や思ひ馳せたる地図の旅  
旧街道猪注意の札拾ふ  
能登風ぐや鳥渡りくる松林

愛の羽根 渡辺舎人

亡き妻のなほ有り難し愛の羽根  
行く停まる別れのワルツ深めて秋  
焔の候バックコーラスの三人揺れ  
抱きあげてとほす誘導員千歳飴  
片恋を懺悔し女生徒鶏頭花

爛熟し 池田雅夫

冬帝の先陣を切る夜の風雨  
語り部の表情豊か炉火明り  
ごつごつと男の料理爛熟し  
長らへて冬の蠅とぞ呼ばれけり  
極月や独り相撲の悪足掻

秋思 日高道を

秋遍路どこかで母と会へさうな  
遠き日のことなど少し秋裕  
色草に消ゆることなき里心  
秋の灯や宇治十帖の恋悲し  
太刀の名は関の孫六上り月

虫時雨 近藤徹平

虫時雨夜間人口激減区  
マンションの間の鳥居濃竜胆  
竜胆や港見下ろす番外地  
秋冷や絶え間なく水吐く石兎  
冬隣羅白国後展望塔

秋が行く 松井 由紀子

沼畔の杉の總立ち鴨来る  
灯も音も消してまみゆる望の月  
ほどけゆく秋思埴輪と笑ひ合ひ  
菊鉢に水遣りの跡書肆閉店  
風の街からりからりと秋が行く

食ひしん坊の童 正木 萬蝶

秋果盛る座敷童が食ひつきぬ  
宿坊の今朝の茶粥や深山冷ゆ  
爽籟や遠くで曝ずる不発弾  
指先冷ゆ刑具の歴史ひもとけば  
秋風や唯一無二のひと送る

秋 深む 青木 鶴城

入り方の棚田の浦や影案山子  
糯粉木と母の皴手に胡麻香る  
澄み渡る導師の喝や秋深む  
来し方に銜ひなどなし蟋蟀  
この瞬間も砲弾の飛ぶ夜寒かな

秋 遍路 原田 秀子

「三之助」の幟はためき新豆腐  
手遊びに弄る胡桃琥珀色  
鈴を振り鈴ふり歩む秋遍路  
長き夜やくり返し聴くノクターン  
碧眼も堂に入りたる秋遍路

水みくじ 檜鼻 ことは

墓仕舞ふ話などして望の月  
実石榴や油絵の具の臭ふ部屋  
秋澄むや吉の文字浮く水みくじ  
木犀や土蔵の町の美術館  
右足で顔拭く猫や寒露の日

吊し柿 内田 恵子

装蹄師の革の前掛け吊し柿  
吊し柿ゆつたりとゆく農耕馬  
夕日影老いとはなんぞ吊し柿  
石臼の飛石伝ひ走り蕎麦  
秋寒し野菜の煮込みたつぷりと



上州三山 松本光子

落鮎のさばしる流れ暮れにけり  
鮎落ちて上州三山水の青  
裏妙義奇岩の花野暮れはじむ  
花野ゆくわづかな雨に光りをり  
小さき花野下校チャイムの聞こえる

吾亦紅 上戸千津子

揺るる影の徒手体操や吾亦紅  
菊の香や見知らぬ人と話しこむ  
廃屋の蔦を目で追ふ豆画伯  
コスモスの百万本や減反に  
秋菜莢の故郷引き寄す彼の小径

芋虫 野口和子

コスモスを揺らしドクターへり着地  
秋風鈴鏝の程よき南部鉄  
栗の実の三つ子二つ子一人つ子  
芋虫の美しきものまだ持たず  
新豆腐山より汲みし神の水

菊 井上玲子

秋寒の葉缶の湯気や今朝の幸  
余生いま贅を極むる菊膾  
あざやかな黄に舌鼓菊膾  
独り居の窓辺群れゆく夕蜻蛉  
夕ごころ置く末枯のさ庭かな

秋遍路 大塚茂子

風一陣袖をとられて七五三  
結願は坂と階きざはし秋遍路  
新豆腐水滔滔と富士裾野  
リュックから子猫の貌や秋桜  
壺春堂の石榴いよいよ魔物めく

雁の列 川崎道子

国境なき大空渡る雁の列  
ホルン唳唳どつと駆けくる鹿の群  
無住寺の扉はみだして柿みのる  
運動会知らぬ国ある万国旗  
そぞろ寒残る練瓦の弾薬庫

蔵書印

福田千春

秋の夜の開けたばかりの美容液  
秋の夜や消しゴム彫つて蔵書印  
Y字路のこの先迷ふ秋の風  
身に入むや座敷童の出る旅籠  
秋風に追ひたてられて旅心

菊人形

松山清子

華やかな衣装の香る菊人形  
菊人形目元涼やか並び立つ  
綺羅誇る鉢の並びし菊花展  
百花園とりどりに咲く鉢の菊  
嵯峨菊のをちこちに咲く貴船道

トランペット

熊倉千重子

沼畔や釣果いかかと鬼やんま  
トランペット末枯の野の黙の中  
六義園の床几で抹茶竹の春  
コロナまた流行り出すとは竹の春  
百日紅細く長くと句の道を

紅葉

飛永鼓

借景はどこを切りても紅葉山  
錦秋の自慢の山に没頭す  
錦秋の山に囲まれ贅沢を  
煩惱を曝け出したる草紅葉  
裏山の山の錦に恋をせり

渡り鳥

西浦千枝子

渡り鳥軒つき合はず移民村  
野あざみや母の墓への道しるべ  
金木犀商ひ好きは祖父ゆづり  
長き夜や巻き戻し見るサスペンス  
退職後も多忙な日々や草紅葉

☆ ☆

# 季音花

五つ紋 染谷風子

一斉に千草撩乱宮居跡  
 生きては般若死して観音白芙蓉  
 猪喰へば五体に滾る荒御魂  
 胡桃割る耳に明治のいくさ歌  
 菊日和黒留袖に五つ紋

小鳥 笹本啓子

夕付きて花野飛び立つ鳥の群れ  
 小鳥来る枝に庭師の豆絞り  
 分校にオルガンの音小鳥来る  
 宿坊に朝の勤行小鳥来る  
 釣瓶落し宝物殿は見ずじまひ

漫ろ歩き 保坂翔太

墨堤の漫ろ歩きの良夜かな  
 桔梗咲く寺SLの大汽笛  
 初嵐とくと仕上ぐる竹とんぼ  
 活断層を避けて蛇穴に入る  
 平飼ひの矮鶏の喧嘩や鳳仙花

瀬 鳴 曲淵徹雄

秋ともし鍼灸院の経絡図  
 秋鯖や玄界灘の波頭  
 冷やかや社殿の裏に疱瘡神  
 手負猪へ女獵師の覚悟の目  
 溪を這ふ黒部の瀬鳴鬼胡桃

穴まどひ 下川光子

穴まどひ土蔵のひびり深まりぬ  
 髪切つて盆の窪よりそぞろ寒  
 やや寒の床の一幅「無一物」  
 大和路の柿色づくや秘佛笑む  
 ベランダのあれこれ寄せて吊し柿

ひとときの秋 河野 はるみ

方言が野分と共に都入る  
よういどん孫は青組運動会  
箸躍る長寿の姉よ菊膾  
黄昏の小径に淡き藤袴  
高楼を燃やすが如く夕紅葉

青 空 横山 君夫

猪を追ふこの面々が村仕切る  
手の胡桃もみ合ふ得を疑はず  
爽涼や林の中のレストラン  
深林を出れば青空彼岸花  
秋の蝶両手でそつと掬ひけり

秋の川 渋谷 きいち

暴れし夜を今朝は忘れて秋の川  
他人ひとの籠のぞく奴居て茸狩  
五右衛門の菊人形や決め台詞  
毀れては雀も祝ふ今年米  
水廻るる通船堀の赤とんぼ

パンダ 石田 慶子

草雲雀買ったばかりの体温計  
秋の風耳震はせて糸電話  
むかご飯青菜散らして盆にのせ  
秋の宵スツール高しカウンター  
パンダ帰国の上野に静寂九月尽

秋の夜 鈴木 玲子

不揃ひの月見団子や子に黄粉  
天より降り注ぐ幸よ曼珠沙華  
修復の狭き墓道よ白野菊  
半襟を付けて明るき秋夜かな  
無に浸るランプの宿や夜半の秋

秋 思 石川 理恵

秋冷や止まりしままの腕時計  
深爪の足の親指冷ゆるなり  
手でちぎる蒟蒻うまし芋煮会  
スマートフォンに操られたる秋思かな  
天候不順頭痛腹痛秋思あり

七 彩 梅澤輝翠

七彩に物干し竿の露の玉  
文机筆先止まる夜寒かな  
彼の国の便り啜へて小鳥来る  
百僧の読経の声や秋澄みぬ  
秋澄むや木の葉のゆらぎ心地よく

風を呼ぶ 越田栄子

組紐の雅なる色初紅葉  
冷やかな表紙つるとファッショ誌  
秋冷の空を機影の脅かす  
胡桃割るCT画像の脳のごと  
風を呼ぶ胡桃細工のイヤリング

色葉散る 寺内洋子

雁渡る檀那寺いま無住寺に  
渦に落つ色葉の未練舞ひやまず  
色葉散る吉野の山の茶屋静か  
人工芝に命吹き込み色葉散る  
竿にあるはつかな歪み雁渡る

銀河鉄道 松島寛久

巡礼の杖置きひと時阿波踊  
神の留守大樹と鳩が帰り待つ  
なぜ踊る体に聞いてよ阿波踊  
りんご積み北前船や波枕  
夜寒空銀河鉄道の発車ベル

日本の秋 田中章嘉

日本には秋の恵みや黄金色  
野も山も紅葉に染まり人招く  
日暮るるや虫啼く声の寂しさよ  
外人も日本の秋を知りて来し  
人混みに屋台も並ぶ菊花展

露の世 宮崎チアキ

長所等伸ばす子育て秋うらら  
秋の川茜模様様の帯のやう  
ひとひらの花かと粉ふ赤蜻蛉  
虫の音のか細き暮れや草長くる  
露の世を夜露に濡れて帰りけむ

芋煮会

瀬戸 雄二郎

川風が味を深めし芋煮会  
年一度出番ある鍋芋煮会  
皆もう親父になりて芋煮会  
芝居果て最後の明かり消え秋思  
パンダ帰りし上野の街の秋思かな

花野径

森 和子

一列の黄色い帽子花野道  
地の果を知らない私花野行く  
錆鮎の不揃ひを焼く峡の店  
日に五便バス来る村の下り鮎  
落鮎や白川郷に結のこる

ゴンドラの歌

野村 美子

ゴンドラの歌朗朗と秋思かな  
のと鉄道希望を乗せて秋高し  
能登未だ瓦礫の山や秋さびし  
里山の廃家の庭の乱れ萩  
彼岸花なまこ壁ある伊豆の村

小鳥来る

西幅 公子

秋澄むや鳥々巡る熱気球  
畑仕事か恋人爺や小鳥来る  
新刈田幸の香を噴くコンバイン  
大粒小粒転がり遊ぶ芋の露  
山の端の夕日の綺羅や釣瓶落し

新松子

葛城 千世子

神妙に閉眼供養新松子  
木の実落つ坂の途中の駐車場  
秋晴るる返信ハガキの追切手  
誕生会ワイングラスに蘭の花  
停車場わつばに生くる秋桜

はぐれ雁

高橋 満耶子

大銀杏の結へぬ大関天高し  
待ちかねし季節到来はぐれ雁  
不動尊の湧き水もらふ初紅葉  
寒暖差アレルギーとや肌寒し  
寄せ集めの俄ベッドやうすら寒

牛 山 戸 美 子

牛膝服を捨てたくなる程に  
犬尻り毛の根元までぬのこづち  
重病の電話に今朝の酔芙蓉  
体重を減へせと言はれど今年米  
鉢に分け「どうぞ」と並ぶ万年青の実

正 月 綿 貫 ひさの

お元日揃ふ六つの恵比須顔  
御降りや庭の草木の生き生きと  
包丁始しやきしやき刻む青菜かな  
挨拶の如庭つつきををる初雀  
歌がるたここぞと婆の襷掛け

最近の名句集を探る 座談会

原 雅子 『明日の船』 司会 筑紫磐井  
高岡 修 『蟻地獄』 網野月を  
緒方順一 『鳴鳴』 大西 朋  
吉田林檎

第23回俳句四季大賞  
記念作品40句 小澤 實

※巻頭三句

正木ゆう子

大串 章

高野ムツオ

小林貴子

稲畑廣太郎

能村研三

※今月の華

岩田奎／矢野玲奈

※俳句と短歌の10作競演

岩永佐保 十二井ゆき

堀田季何 講演

「現代世界の戦争俳句」

※好評連載

成瀬政博

筑紫磐井

坂口昌弘

青木亮人

大西 朋

井上泰至

神作研一

藤村公洋

堀田季何

諸家書架

二ノ宮一雄

一望百里



Haiku Shiki

2025年1月号

12月20日発売  
定価1100円(税込)

https://www.tokyoshiki.co.jp/ 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

## 私の三句

岡田宣子

### 老舗ホテル若葉の中の車寄せ

建物に興味のある友人と、軽井沢のクラシックホテルを巡るツアーで訪れた時の句です。軽井沢には百年以上前、軽井沢初のホテルとして開業した、歴史と伝統のある万平ホテルの存在を聞いていた。私の出身地、新潟県上越市は百年名家の料亭があっても伝統ある高級ホテルは無く、何時か訪れてみたいと思う憧れのホテルになっていた。ある時旅行雑誌の中にツアーを見付け、クラシックホテルの素晴らしさをゆつくりと味わいたく申し込んだ。万平通りを抜けると若葉が輝く森の中、白壁の重厚なホテルが構えていた。館内は落ち着いて気品があり期待通りの趣である。メインダイニングルームと廊下に面するガラス窓は横に長く、麓で若者がレジャーを楽しむ山嶺の絵が、ステンドグラスで彩られており、ルーム内部の格天井と相俟って豪華さを極められて圧倒された。コースランチ付きの見学のため、選りすぐりの食材の料理と洗練されたウェイターのおもてなしに、私と同様ツアー客も静かに心地良さを味わっている。国内外からのゲストに愛される由縁は、万平流おもてなしを求め訪れるのであろう。又、機会があったら訪れてみたいと思った。

### 縄文の遺跡の空に雲雀鳴く

雲雀の兼題が出た時、青森の三内丸山遺跡を訪れた情景が目に見えかんだ。広い野原に再現した竪穴住居・高床倉庫・大型竪穴建物が点在している。他にシンボリックな大型掘立柱建

物が目を引く。縄文人の気分になって竪穴住居の一つに入ってみる。地面を掘り込んだ床の真中に、炊事をしていてであろう窪みも復元している。クリ・クルミなど潰す石器や土器は発掘されて足下にも無いのに、遥か大昔の縄文時代に、タイムスリップした様な感覚になった。住居を出ると青空へ昇って行く雲雀の鳴き声が響いていた。

### 下間を抜けて開ける三方五湖

昨年の五月末、水明ゆかりの地「若狭句碑めぐりバスツアー」に参加した時の句です。若狭に入って最初の目的地の三方五湖へ、五つの湖はすべて違う色に見えるという五湖を一望する場所に向かう。鬱蒼とした森の中のレインボーラインを進み、突然視界が開き三方五湖が視野に入った。今まで出会えた事のない、風光明媚な景観に感動しすぎて、そのままを表現した句です。このツアーのメイン、水明ゆかりの句碑がある公園では、若狭水明会と鳥羽谷俳句会の皆様、句碑のお手入れをし護って下さっているお話を聞き、歴史ある水明の一会員となりこの場に立っているご縁に、感慨深いものがあった。その後若狭のみどころ、名刹、鯖街道、名水百選の湧水池など巡り、昔そのままの良さを残す、魅力に富む若狭の虜になっていた。

しばらくして鼓笛集に若狭を詠んだ三句を投句した。その句が大村編集長に、巻頭に選んで頂き、今年度の鼓笛賞まで賜り、誠にありがとうございました。いっそう忘れ難い若狭の旅になりました。



## 私の三句

越田栄子

## まだ色を持たぬ波音初日待つ

歌手であり優琴の奏者である友人が私にはいます。優琴は琴を小さくしたような形をしていて、ドレミの音階ではなくどの弦を弾いてもきれいなハーモニーが響くようにチューニングされている即興演奏のためのオリジナル弦楽器です。

ある日、周防大島の浜辺から彼女の奏でる優琴の音色とともに日の出の映像が届きました。その時送った友へのメッセージは、

暁の空にゆつくりと昇り来る朝日

まだ色を持たない波の音

時折聞こえる鳥の声

切ないままで心の琴線に触れる優琴の音色、映画のようなくとも素敵な一日の始まりです。素晴らしい映像ありがとうございました。

この句はそんなラインの一齣から生まれた一句です。

## 打ち寄せる昏き色あり梅雨の海

私は山育ちのせいにか小さい頃から海への憧れが強かったように思います。だからと言ってマリンスポーツが好きな訳でもありませんが、無性に海へ行ってみたくなる時があります。予定のない二人の休日。どこか行きたい所あると聞かれて、すかさず海が見たいと答えました。行った所で打ち寄せる波

と戯れ、運ばれて来た貝に思いを馳せる、そして海風を受けながら光る海と水平線の青さをじっと眺めている、それだけで満足そんなひと時が好きなのです。

この日訪れた海は、前日に降った大雨の影響なのかことなく海の色に昏さを感じました。

## 鴨引くや風にリズムの生れし日に

少し前まで鴨達で賑やかだった池は、今は水面に空を映すだけの静かな池となった。渡り鳥はいつ旅立つ日を決めるのだろうか、ふとそんな疑問が頭を過った、渡りは一歩間違えれば死と直結する正に命懸けです。

では何を基準とするのだろうか。渡り鳥は驚くべきナビゲーション能力を持っていて、昼間に移動する鳥は太陽の位置を利用して、また夜に移動する鳥は星の位置を利用して方向を定めているのだそうです。また地球の磁気を感じできると考えられており、迷子にならずに長距離の移動が出来るのだそうです。

なるほどと思いつつも最後の決断は、自身の本能があるがまま微妙な風のリズムを感じ取った時に旅立って行くのだと私は思います。

鴨達の去った池を見ながら、また元氣に戻って来るのを願うばかりです。

# 現代俳句鑑賞

## 網野月を

岩偶に遺る乳房やいわし雲

藤田直子

〔俳壇〕11月号・風となるより〕

「岩偶」の時代は縄文時代でもあろうか。人間がまだ頗る元気で肉体的にも精神的にも健全であったころの遺産である。「乳房」を表現することのプリミティブな人間の感性を見ているようである。秋空の「いわし雲」の幹旋が絶妙である。他に「萩に立つやがては風となる身かな」がある。

愛日やどの辻で引き返そうか 池田澄子

〔俳句四季〕11月号・巻頭句より〕

上五の季語「愛日」は冬の日差しのことである。その日差しを愛でて「愛日」と言うのである。いにしえよりある言葉である。その「愛日」を感じながら散歩している作者は、引き返すのが勿体無くて仕方ないのである。

銃と血がマグマの如き一神教 筑紫磐井

〔俳句〕11月号・百面目のシュルレアリスム宣言(1974)より〕

「一神教」のある側面の残酷さを「マグマ」と喩えながら、反戦の一句に仕上がっている。ある「一神教」と異なる「一神教」の有史以来の諍いの歴史を考えずにはいられない。他

に「第四のアバンギャルドに虚子るなり（注…未来派・ダダ・シュルレアリスム・花鳥諷詠）」「我は婆伽梵しあはせ夏の青い薔薇」がある。

頭蓋骨ほどの固さの南瓜かな

後藤章

〔俳句〕11月号・十二句より〕

「南瓜」に脳味噌が詰まっているような感覚で、また意思が働いているような、ある意味で擬人法的描写である。硬い、堅いではないところに作者の意図がある。他に「吉田拓郎なんか聴きうる白露かな」がある。

雑炊や居眠りの吾も数のうち

中西夕紀

〔俳句界〕11月号・新作巻頭より〕

中七座五の句意は読者によつてとらえ方が異なるかも知れない。筆者は、眠っていて雑炊を分けてもらえる、食べられると解釈してみた。他に「鬼の手を見せむと誘ふ焚火かな」がある。

烏陰の柿の撓を眺め居る

久行保徳

〔句誌「草炎」11月号・大津島より〕

「眺め居る」のは作者ご自身であつて、「柿の撓」に対する

動作を表現している。動作つまり「柿の撓」への反応を描いているだけで、作者の感慨を表出した語句は句中にないのだ。しかしながら、「眺め居る」だけで「柿」への肯定的な作者の思いを感じることが出来る。他に「秋の潮差す回天の島の裾」がある。

秋天に秋天のほか何もなし 伊藤政美

〔俳句四季〕10月号・巻頭句より

座五の否定形「何もなし」によって、「秋天」の存在を誇張して。そして「秋天」の純さ、広大さを表現しているのである。他に「白い皿並べれば吹く秋の風」がある。

一球に響動む球場空ひでり 菅原卓郎

〔俳壇〕10月号・ちまたの夏より

緊張した試合の展開を思わせる。実によく球場が湧きたっているのである。「一球一球」として試合の経過を辿るのが実景を描写することになるのであるが、「一球」に絞ったところに俳句的な景の切り取りが完成している。他に「炎昼の御明かしゆるる籠り堂」がある。

糸屑のやうにねむればちちろ鳴く 大石雄鬼

〔句誌〕陸 10月号・夜の硬さより

「糸屑のやうに」の直喩表現に疲れ切った肉体を想像する。「糸屑」と肉体を関連させようとする直喩表現の王道である。他に「夜なべして夜の硬さになつてゐる」がある。

六月の影に尻尾を持つ女 原田もと子

〔句誌〕円錐 103号・六月の影より

「尻尾を持つ」と言うことは何であるか。化けているのか。ということとはつまり眉唾ものである。「六月の影に」とあるので、禍禍しいものではないようだ。子狐が上手く変身できなかったものと思う。他に「春シヨールの乱れを直すウインドー」「玉子焼交換し合ふ花の下」がある。

太陽がすましはじめる水の秋 渡辺誠一郎

〔句誌〕小熊座 10月号・極星集より

「太陽」そのものを擬人的に捉えて澄まし顔している、と解釈できるであろうか。それとも「太陽」光まで拡大解釈してその透明感を言い当てているとも解せるであろう。その場合は、光が大気を澄まし、その大気が水を清澄している。そんなイメージであろう。

蒲の穂やパンクロッカーどこへ行つた 佐川盟子

〔句誌〕小熊座 10月号・海嶺集より

「蒲の穂」の突つ立った景がモヒカンを惹起させている。また穂を囲む線形の葉のツンツンとした形が、これもパンクロッカーの表象にぴったりである。

イメージトレーニングはじめる秋の噴水よ 芹沢愛子

〔句誌〕青山俳句工場05 10月号・作品より

中七で切れを作つて読むのであるか。それなら上五中七は作者自身の心決めの句になる。もしくは、座五の「秋の噴水」への呼びかけとして読めば、秋の噴水に人格めいたものを認めて、秋景の中の自分を想像する噴水の気持ちを感じて、いるようにも解せるのだが、噴水への感情移入は少々深読みし過ぎかも知れない。

# 『水明誌』を繙く（水明十月号）

長井 寛（一般社団法人現代俳句協会監事）

## 序の舞の形にひらく秋扇 山本鬼之介

広島や長崎に原子爆弾が投下され、ようやく第二次世界大戦の終焉を迎えた。世界に冠たる民主主義大国であるアメリカ合衆国やイギリスなどを敵に回して戦争を挑んだ日本はいつた何が目的だったのであろうかという疑問が脳裏に焼き付いたまま離れることはない。

大都会の一面が焼け野が原と化した後、復興が始まった。国民一人ひとりが懸命に働いたご時世でもあった。街じゅうに流れる「りんごの唄」に励まされ、また街頭テレビの力道山の空手チョップが外国人を倒す画面に一喜一憂、辛さも忘れさせるひと時であった。以来戦争のない六十年が過ぎようとしている。

「序の舞の形にひらく」の掲句の措辞が教示するように、いま日本は進むべき正しい航路が如何にあるべきかが問われている。民主主義国家日本の根本精神は主権在民である。政治家はもとより国の公僕、パブリックサーバントなのである。金権塗れは言語道断、語るに値しない。国民が襟意を正し、着実に誠実に歩んでゆくことが肝要であるという意が汲み取れる。

日本丸の船長は国民一人ひとりである。今正に日本の真の国造りの幕が切って落とされたのであると作者は扇を開きながら教授している。

## 病葉や言葉貧しく一日終ふ 丸山マシミ

樹木に芽が出そろう夏の候、色づきすぎた葉は静かに散ってゆく。今年は秋になっても酷暑が続いた。そんな折、言葉交わす気力さえ萎えがちになり、一日が虚しく過ぎてゆく、が句意である。言葉が途絶えてしまうと家庭は明るさを失ってしまいがちである。

四十雀たちはお互いに鳥語を用いて情報交換している。集まれば「ヂヂヂヂ」蛇を見た時の警戒しろは「ヒーヒーヒー」などと鳴く。また鶯たちは敵が侵入してきたぞ、警戒しろの意のけたたましい声色を発する。こうして鳥は鳥語を駆使してより豊かな環境をつくって暮らしている。

「始めに言葉ありき」は新約聖書ヨハネ伝一章にある言葉である。創世は神の言葉からはじまった。言葉すなわち神であるという意、また「バベルの塔」は「言葉の混乱」を意味する。

今世界は暗黒の世を迎えている。人々が言葉を交わす前に敵国と見做してミサイルによる攻撃を仕掛けていく。つまり相手に対して問答無用なのである。意思疎通を図る言葉をもつ人類がその言葉を破棄してしまつたら、世界は暗黒に陥ること必定である。それ故月への研究は、本末転倒であると作者は言外に詠っている。

# 俳誌望見 染谷風子

「野火」二〇二四年九月号 通卷九三六号

主宰 菅野孝夫 発行所 埼玉県春日部市

昭和二十一年六月、「馬酔木」の僚誌として篠田悌二郎が福島市にて創刊・主宰。昭和五十七年一月から埼玉県春日部市に発行所が移る。師系は水原秋櫻子。「新鮮なことばで二十一世紀の抒情を追求する」をモットーとしている。

巻頭の主宰詠「三步あるいて」十六句より四句。

泥けぶり泥に逃げ込む泥鱈の子

羽拔鶏三步あるいて立ち止る

父の日と言はれただけで終りけり

真実を知つてしまつた蛇の恍惚

一句目、無季の句。五・七・五の各頭韻の「ど」が軽やかなリズムを生み、「泥鱈の子」の敏捷さと響き合う。二句目、三步歩いて立ち止まる羽拔鶏は恰も自分を啄木に譬えているかの様だ。三句目、誰しも思い当たること。座五の「けり」に作者の溜息が聞こえる。四句目、「蛇」は作者か。「真実」とは具体的に何か。読者の想像力を限りなく刺激する句だ。

同人自選「深海集」より共鳴句四句。

南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏梅雨天に 阿部 誠文  
添ひ遂げし六十年や藍浴衣 鶴沢よしえ  
自転車補助輪取れて風薫る 橋本 研二

ガス工事十人ほどが炎天下 和田 秀巳  
一句目、人は極楽往生を願ひ念仏を称える。作者は「梅雨天」に名号を称える。意味深長な句。二句目、仲睦まじきお二人には揃いの藍浴衣が御似合いである。三句目、「風薫る」の季語の斡旋が秀逸。四句目、炎天下の作業着に身を固めた職人はいかにも暑そう。「十人ほど」の措辞も適確。我々の日常は彼等の汗に支えられている事を忘れてはならない。

同人集「蒼茫集」より共鳴句五句。

駐屯地 空砲の音 朝曇 古橋 純子

かけて見る夫の遺品のサングラス 日向野君子

転移なし術後五年の月涼し 佐久間秀男

裏年の李を笹に数へけり 戸田 一子

慰霊碑の前に日傘をたたみけり 村山 靖子

一句目、朝曇は日中には猛暑になる事が多い。駐屯地の空砲射撃音に作者は言い知れぬ不安を感じる。現今の国際情勢の象徴か。三句目、「月涼し」は作者の心境其の物と思ふ。

同人集「春蟬集」より共鳴句三句。

草千里牛放たれて夏の霧 小坂 由紀

切除せし胸の薄さよバリ―祭 武田ラーラ

郭公くわくこう洗濯物のよく乾く 伊藤 光子

全体を通して、自分の感受性を自分の言葉で、新鮮に表現した作品が多いと感じた。野火俳句会の益々の発展を希う。

## 句集喝采

菅原卓郎

### ◆米田規子「ポトフの湯気」 東京四季出版

著者略歴 昭和二十四年石川県生。同五十九年「響焰」入会。平成十二年「響焰」同人。令和二年「響焰」主宰継承。現代俳句協会会員。横浜俳句会会員。

俳句は詩であると標榜する作者の第一句集。詩的表現の句が多く掲載されている。句集名はご主人の赴任先のフランスをイメージした句による。三千句より四百五十句選別。

ウイスキーボンボン冬の夜の二人  
たれかれと心地よい距離金木犀  
帰り道大きく逸れて虫の闇  
家古りてほのぼの林檎煮る句い

第一句、お酒でもあるウイスキーボンボンには、親密性を急に増す力が潜んでいる。冬の夜は猶更である。思わせぶりが秀逸。第四句、昔はその季節になるとよく林檎を煮て食したものだ。甘酸っぱい匂いが今でもほのぼのと脳裏にこびりついている。古い家には良く似合う。

鳥たちの空の領分 牙返る  
秋霖やバツグに赤い電子辞書  
白南風や一身上という別れ  
忙中の閑を探して冬木の芽

第一句、大空の鳥の行く領域を切り取り、そこだけ寒さが戻っている。季語がよく生きていて。第二句、秋の長雨時は句作りには最適。句会にも落ち着いて参加できる。電子辞書は必携品。おしゃれな色遣い。

### ◆石井 稔「顔の原型」 俳句アトラス

著者略歴 1958年東京都台東区生。1998年「好日」入会。2001年「青雲賞」受賞。2010年「好日賞」受賞。2003年「白雲賞」受賞。「好日」白雲集同人。現代俳句協会会員。

作者十二年ぶりの第二句集。あとがきで俳句の韻律及び季語の芳醇さは、いつの世であっても変わるものではないと述べている。まさしくその通りである。

炎昼に來て神將に睨まるる  
定年や水がちやがちや緑茶ハイ  
うそ寒や背のなき椅子のエゴイズム  
熔接の炎吹き出す四日かな

第一句、新薬師寺にての句。薬師如来をお守りする十二神將に、真夏の真昼間強い眼力を感じた。神將の目にはガラス玉が用いられかなりの迫力が有り、正に睨まるるのである。真夏の暑さと凜とした莊嚴さを感じる一句。第二句、底に沈んだ緑茶の粉を何とか溶かそうとする定年紳士の葛藤を、オノマトペでうまく纏めている。

さくらさくら西暦で歳をとる  
微笑みが顔の原型草の花  
ふいに來る風のかたち花の散る  
芭蕉忌のちぎり蒟蒻煮しめをり

第一句、スマホの世界は凡て西暦。昭和は遠くなりにけり生まれ年までスマホを操るのが大変。第二句、野の草には巧みのない笑顔が有り、人間の顔も本来微笑んだ顔である。

山本鬼之介 選

水明集

虫の声石碑一つの閑所跡  
畦道を孤影を曳いて穴惑  
村里に秋の灯ひとつまた一つ  
さりぎりす二つに折るる脚線美  
長生きの秘訣なるとやとろる汁

宿明かり川面に映る良夜かな  
高原の野外良夜の音楽会  
乾酪を醸す廃校銀杏散る  
秋澄むや枯山水の礫の波  
秋茜群れの中なる吾子染まる

さいたま 反町 修

岡田宣子

棟上げの檜の五寸金糸草  
棒持てば叩く癖あり芋嵐  
さちかうを軸の懸巢鳥に添へてやる  
置鉤に泥鰯いつびき秋半ば  
藪桔梗丈長くして会釈せり

「水明」の創刊號や鬼灯置く  
日輪を引き摺る如く朱のカンナ  
秋の蝶砂丘の空へ吹かれ行く  
マティーニとハードボイルド九月の夜  
墓仕舞ひに参るや秋の彼岸寺

坂道を下れば秋の日本海  
秩父路を黄に染め尽くし女郎花  
寝付かれぬ夜は語らむちろ虫  
秋めきて風のありなし項撫つ  
零れ落つる空の青さや螢草

工芸の切子灯籠吊す宵  
駒並べドミノ倒しや芋嵐  
延べ段の影を拾うて白桔梗  
居酒屋の置き傘を借る秋の雨  
妹の云ふ秘密の場所の山桔梗

さいたま 飯田忠男

小林京子

菅原真理

清水桂子



夕霧やたてがみ振りつ仔馬來ぬ  
さりげなく寄り添ひゆくや霧の駅  
ぬくもりの恋しき腕霧の古都  
夕霧やバナラの香るベーカーリ  
秋の昼大きく跳ぬる池の鯉

さいたま 霜多光代

献灯のほむら搔き消す黍嵐  
川はぬる鮭は目の下尺五寸  
待宵のいほりを洩るる般若声  
連れ去らるる畝の残り香初嵐  
桔梗や明けの祠に御神灯

伊奈 菅原卓郎

千羽鶴戦ぐ水辺の夾竹桃  
白粉花ままごとの莫塵残されて  
こざつぱりと古暖簾そよぎ処暑の風  
秋めきて詣んじてみる七草を  
日曜は平穩に過ぎ秋扇

寺町知子

朝ぼらけ島のぐるりを霧の岨  
海影を深むる入日処暑の鳥  
総やかに峰を流るる真綿霧  
鶏の浮かれ歩きや秋の昼  
秋の昼日の絡み合ふ奥座敷

さいたま 皆川更穂

リムジンの路線変へたる祭笛  
銭湯のチケツト貰ふ祭の子  
鉄棒の焼けついてをり花カンナ  
西の京駅のベンチに捨扇  
味噌蔵の裸電球法師蟬

池田珪子

波頭然と見沼の芋嵐  
門前の仁王の睨み芋嵐  
露草に靴紐濡らし友を訪ふ  
秋雨や夜のマイセン置時計  
どことなく影ある桔梗父好み

越谷 阿部幸代

宿坊の夜明けは早し霧襖  
夜霧濃き秘湯のランブ四肢伸ばす  
別腹と芋食む友の高笑ひ  
紅葉を休息しつつ謳歌せり  
休耕田を飛びたついなご千羽目か

篠崎紀子

三センチ縮みし背丈ほたるぐさ  
無花果を剥いてハム巻く平和かな  
豊年や雲を縁取る金の糸  
竹輪麩のやうな女と酌む新酒  
小舟出てダム湖の月を掬ひをり

さいたま 森下山菜



燈火親しや軍師に出会ふ場面視る  
秋の山迷ひて出会ふ河童淵  
新涼や夜をあやなすプレリユード  
六方を決むる役者よ秋涼し  
涼新た時を重ねし古戦場

平塚 丸屋詠子

街道に残る仏具屋盆灯籠  
かなかなの声の落ちくる木陰かな  
中天に迷路のあらむ赤とんぼ  
鬼灯や口遊ばせてひとりぼち  
銅鑼の音の散らばる水面秋灯

さいたま 本橋稀香

コスモスに風やゆるりと帰る友  
毬栗を踏み込み胸の底の澗  
銀鱗の清らな揺らぎ秋の水  
手の甲の染みを見せ合ふ秋灯  
秋さびし市井を染むる茜雲

大阪 遠藤人美

露草の青は空からおくりもの  
露草のおしやべり聞こゆ朝の庭  
生命のあふるる花脈桔梗かな  
黍風弦楽奏のひびきあり  
秋灯下繕ふ母の鼻めがね

山岸久美子

霧深き九十九折りなる道路鏡  
霧霽れて河童橋より笑ひ声  
鬼押出しの霧を纏うて山を降る  
突出しは里芋と烏賊老女将  
徳積みし祖先に感謝菊人形

さいたま 新 曆文

月光に打たれ若者奮ひ立つ  
合唱に公民館の糸瓜揺る  
初嵐ガス灯暗き銀座裏  
カンナ燃ゆ競馬場からファンファーレ  
カンナの緋指の乱るるフラメンコ

綿引まりこ

流星やきらきらネーム読めませぬ  
吾亦紅合点のゆきし名の由来  
新蕎麦にしたり顔する夫のゐて  
老犬の尾とじやれ合ふか狗尾草  
葡萄の実五つ並べて水彩画

東京 畑宮栄子

一台に五人乗りたる墓参り  
サルビアの赤の残照地平線  
熱闘の五輪ふはりと赤とんぼ  
かなかなと互の居場所知らせあひ  
竜胆を愛しみて下る須川岳

加藤でん治

秋の灯や障子に映る人の影  
秋の灯や山の麓の民家から  
秋草や川のほとりに水神碑  
秋草や陸の松島風なびく  
上弦の月に誘はれ交はず杯

さいたま 千坂平通

銀漢のささやき聞こゆ夜の海  
竹ざるのさみどりの桃運びけり  
秋立つやほほを撫で来る朝の風  
ヨガマット小脇にかかへ今朝の秋  
大戦の歴史説きたる生身魂

さいたま 阿部貞代

月代や巨大空港の寢息  
月白やひそと隣家へ蔓の延ぶ  
秋高し前へ傲へのキッチンカー  
学食の券売機に列いわし雲  
里祭苗字ひといろ寄進帳

田中弘子

娘を偲び供ふるシャインマスカット  
仏壇の夫と息子に缶ビール  
仏前に娘好みし秋の花  
山門にピラ「兜虫あげますよ」  
さつぱりとまとめし髪に晩夏光

杉戸 佐々木史女

枯野行く尾瀬の歩荷や更に行く  
風花や花の利那に風となり  
饒舌も寡黙も息の白き朝  
熱爛や旅の独りを染めあげて  
宿坊の膳に新そば般若湯

香田裕誌

女郎花土塀に沿うて道案内  
夕陽浴び墓地に華やぐ女郎花  
罎雲旅は道連れ坂の町  
鉄砲の弾痕深く法師蟬  
故郷の病臥の兄も聞くちちろ

さいたま 竹澤和子

棹を差す流れの土手に蕎麦の花  
蕎麦の花夜目にも白き裏の畑  
大文字残す火床の積怨や  
鬼灯や垣根をわたる鳥三羽  
木星の輝く空に流れ星

利根 倉田星歩

高殿の二胡弾くひとに居待月  
草叢を占むるちちろに聞き惚れて  
美意識の高き男の秋日傘  
雨に濡れ乱れ咲きをり女郎花  
仏前に故郷恋しき女郎花

小川洋子

夕ぐれて秋めく風と一万歩  
荒畑の草も秋づく色となり  
女郎花いまを盛りの真性寺  
銀輪で下る坂道秋の晴  
湯島天神女坂より秋の婚

さいたま 森下美智枝

真つ新たな布巾をおろす秋初  
奥鬼怒のぬるき外湯やくずの花  
廃屋のひしやげし樋や葛の花  
くずの花逆立したる猫車  
鰻屋に野分の後の触れ太鼓

さいたま 森美枝子

稚児の乗る馬も化粧の秋祭  
どどーんと狼煙棚引く秋祭  
秋祭「サクラトラム」の駆ごとに  
秋祭胡弓と三味の町流し  
満作の象徴たらん稲雀

北山建治郎

芋虫や一葉ふた葉に憚らず  
齒形つく葉に芋虫のはみ出せり  
秋めきて髪留めをとるしぐさかな  
秋めくや閉会式の甲子園  
秋めくや学園祭の案内板

平野 楽

夕まぐれほほぎ髪にきつねの面  
むせぶ胡弓に揺るる編笠風の盆  
武蔵野の初穂煌めく朝日影  
同行の面影橋や紅葉川  
ひろびろと蕎麦の花咲く幌加内

吉川 杉浦千祐

新涼や先に来て待つ二人席  
境目を埋め尽くしてゐる秋桜  
月明に道路を剥がす工夫かな  
決めかねて空見上ぐればもう九月  
仲秋のひと・もの・かねの速さかな

石関六弦

秋彼岸傾くままに石地藏  
秋彼岸遺影の父は若きまま  
秋彼岸無縁塚にも香焚かれ  
檀家寺の僧の老いたり秋彼岸  
スーパ―のおはぎを三個秋彼岸

若狭 山崎郁子

奥床し甘藷尽しと京男  
誰も彼も食はぬカンナや畑の中  
赤土が好きかも知れぬカンナ咲く  
一斉に翔び発つ鳩や秋澄めり  
首塚に即かず離れず秋茜

秋谷風舎

秋澄める富士の上には空展ぐ  
深山茜清き水辺で生くる赤  
秋茜穂先に次次止まりけり  
赤蜻蛉お地藏さまの手の上へ  
今日の月シャチのジャンプと重なりぬ

さいたま 小駒さち子

初嵐米を求むる人の列  
過疎の村柿どろばうは獣なり  
柿贈り柿の絵手紙返りたり  
小手柄かぬ節高指よ菜を問引く  
秋晴や世紀の快拳に世界沸く

若狭 松村笑風

イグアスの虹に切り入る遊覧機  
白南風にわが身を散らすさがり花  
秋立ちぬ若妻の駆るコンバイン  
街道をダンブ疾走葛の花  
野分晴三国小唄の三味の音

石黒由美子

秋涼し一番船は初島へ  
秋日和残り少なき青糸の具  
秋うらら盲導犬に手を振る子  
隣の子民族衣装を秋祭  
連峰は薄墨色や秋徽雨

所沢 飯室夏江

明日のこと語る青年雲の峰  
自転車を立ち漕ぐ少女稲光  
辻説法に一瞬の黙稲光  
砂風呂に波音聞くと星月夜  
ビルの間に残る廃屋藪枯らし

大熊健司

篝火にシテの摺り足秋澄めり  
秋澄むや手漉きの和紙の葉書来る  
泡立草龍馬の夢は山河越え  
秋の灯にマトリョーシカを並べをり  
秋灯や街の本屋を懐かしむ

さいたま 羽島秀子

鉢植糸の紅葉愛しや水注ぐ  
軒先の紅葉小径にふんはり  
紅葉映ゆ榛名湖水の優しさよ  
堂々の富士に抱かれし紅葉かな  
気品ある手作り陶器紅葉合ふ

榎本道代

幼子に鹿の瞳は潤みけり  
慣れぬまま人差し指に鹿触れて  
鹿の声聞けず煎餅失ひぬ  
彫刻のごとく灯のごとく立つ鹿  
鹿と会ひ仏に祈り奈良茶飯

吉川拓真

芋嵐気配のままに夕餉かな

教室の眠りを誘ふ昼の虫

恋を捨てのぼる石段すがれ虫

敬老日チャンネルずつと時代劇

入場時ことに晴れやか体育祭

咲き継ぐやカンナの主張底知れぬ

京菓子に手なるお点前秋の雨

空模様為すこと惑ふ九月かな

稲穂手に出来栄え量の農夫かな

みちのくの匂尋ね行く九月旅

秋祭高齢目立つ過疎の村

復興地に轟く太鼓秋祭

野良猫の遊び相手は稲雀

稲雀防鳥ネットもくぐり来る

隠れたるはずの穂が揺れ稲雀

秋澄むや路地に影なし風もなし

赤とんぼおんぶの吾子に子守唄

無人駅下車の撮り鉄赤とんぼ

秋澄めり歩み始めの新紙幣

最終の遮断機の音秋澄めり

川口 新井のり子

さいたま 樋口元美

流れゆく雲の速きや秋澄めり

秋澄むや山を背負ひて尾瀬の道

小屋を閉つ歩荷と下る赤とんぼ

水面なみ尾の先揺るる赤とんぼ

思ひ出したやうに秋夜の乾杯

小山あつ子

星月夜仰げば心動かさる

艶めける金継ぎの碗星月夜

星月夜並ぶ二人の影法師

ゴッホも見しか耿耿たる星月夜

北出久美子

上尾 室井早都子

心地よき風吹く今宵星月夜

かたはらの寢息健やかいなびかり

柵越えの球は此処らに葛の花

野分の夜話の弾む父子かな

糸井しるく

さいたま 駒谷行雄

ビル街を吠ゆるが如く野分雲

稲妻に落ちの途切るるラジオかな

中天に鎮星ほのか良夜かな

独りキャンブ罅ぜる音さへ見つめ居り

露草が染めしか縹色の空

秋彼岸義母に似てきし妻の顔

秋場所や去る立行司への拍手

重陽や久々に帯締めて街  
菊酒や夫と語りぬ夜半まで  
愛らしき三角顔のかまきりよ  
蟪蛄の我をぎよろりと睨むなり  
土産手に母待つ家へ颯雲

さいたま 高原和子

工場跡泡立草の原となり  
閉ざされし門扉の横に泡立草  
瑞穂の国泡立草の騒めけり  
AIにあはれ教へむ月明り  
秋灯を吸ひ込むやうに夜の雨

さいたま 岡田芳春

望の月群青の空めぐり行く  
薄月やとろりと甘き空の色  
朝顔や口角上げて紅を引く  
ゑのころ草邪気なく揺るる住居跡  
雨戸閉ぢ亀になりたる野分かな

伊藤美津子

秋めきて教室の窓開け放つ  
秋めくや小枝刈り取る軽き音  
紅芙蓉髪に飾りてはにかむ子  
芙蓉閉づお迎へ急ぐ保育園  
阿六櫛奈良井の宿の星月夜

湯浅 和

秋の水底まで見ゆる魚の群れ  
蜉蝣やガラスに写る人の影  
秋の川立ちつくしたる鷺一羽  
秋扇幸を呼び込む我家かな  
木の影を写し流るる秋の川

和歌山 南條さわゑ

名も読めぬ祖先の墓や秋彼岸  
秋彼岸いつ墓仕舞ふ老姉妹  
友焼きし器に盛るや胡麻おはぎ  
九十の母の手を借り胡麻叩く  
由布院の霧に沈むや朝木立

三浦真由美

花抱き風に抗ふ泡立草  
秋灯本の世界を彷徨ひて  
打ち消して尚打ち消して泡立草  
緑林に消え入る廃線秋静かな  
長き夜を夢路辿りて至福かな

さいたま 鈴木香音子

秋暑シラタンの籠に血圧計  
紅萩の角曲がるまで見送れり  
民生委員訪ねてきたる秋彼岸  
旅に出て捜してをりぬ秋の雲  
ラーメンの汁飲み干すや虫の闇

石井直子

思ふまま枝伸ばしたる庭の萩  
小ホール秋の弦楽四重奏

さいたま 播磨 進

父真似てうどん粉を踏む秋彼岸  
三日月や雲より出でて雲に入る  
秋の山遠く川音聞こえけり

芋煮ころがし嫁の挑戦さしすせそ  
葡萄棚車窓に迫り気を持たす  
友より届く元気の便りマスカット  
喧嘩して逆らふ夫や温め酒  
親と子と呂律怪しく温め酒

さいたま 緒方みき子

もてなしは播りたてまぶす胡麻よごし

木谷葉子

宮代 関谷多美子

何くれと胡麻を振る母社交的  
秋彼岸過ぎれば残り三月かな  
「木谷家」の窪みを洗ふ秋彼岸  
一世紀越えし伯母より二十世紀

秋めきて樹々のさやぎも夕雲も  
畦道の露草父母に供へけり  
絵の搬入了へ名月を仰ぎけり  
秋ざくら人みな永久の旅に発つ  
錦秋や太極拳は老いの友

和歌山 嶋田洋子

さいたま 穴戸洋子

こぼれ種の朝顔育て絵日記に  
いち早く届くちろや福耳に  
朝顔と早起き競ふ老二人  
小さい秋見つけに老の一人旅  
種飛ばし合ひに参加の葡萄狩

秋雷の枕にひびく地鳴りかな  
花カンナ昼の太陽一人占め  
野分あと木切れ散らばる道の端  
無人家となりて八年葛の花  
天も地も裂けんばかりに秋の雷

通学路睨みをきかすいぼむしり  
路地裏のじやんけんぼんや鬼灯市  
定まらぬ母の視線やそぞろ寒  
白ばかりなる白粉花や夕焼雲  
虫しぐれ背にある赤児泣きやまず

さいたま 山下ユリ子

東京 桐山遊童

日陰無くしたたる汗に出る吐息  
日中は蟻も這ひ出ぬ極暑かな  
大夕立道路を川に変へにけり  
冷麦で熱き体を冷やす昼  
残暑きびし壊れし季節詠む俳句

若干の雨では止まぬ踊り太鼓  
祭り会場若手議員の影薄し  
初嵐我慢して待つ兄弟喧嘩  
風呂掃除終へて清しき九月かな  
秋晴や京都訛りの指導員

さいたま 川島夕峰

発行所路地下校の子たち通る秋  
秋深し喰ふも喰はぬも自由なり  
胡麻干して晴れの続くを願ふ日日  
秋彼岸マクドナルドの爺と婆  
連れ立ちて父子魚釣り秋彼岸

さいたま 門真宏治

秋澄むや眉濃く描くマチネーの日  
一村のアダン懐かし秋澄みぬ  
秋澄むや目に沁む白き襷掛け  
胸飾る珊瑚より濃し赤蜻蛉  
赤蜻蛉五島の海に鐘響く

横山礼子

寝乱れし襟かき合はせ草雲雀  
夜のうちに帰るつもりや草雲雀  
湧水と月の光を掌に受くる  
歩こうか月の明るき宵なれば  
後悔と少しの恨み二日月

東京 山中いちい

上着手に通勤の朝秋暑し  
高値行く新米僅か母の元  
突堤の先へ竿出す鯊狙ひ  
枝豆にじやれつく猫の手に産毛  
枝豆の莢山にして聞き上手

鈴木藻好

草雲雀亡き人悼む音と聴きぬ  
草雲雀終の棲家か河川敷  
今朝もまた白鷺一羽何処へ往く  
醉芙蓉紅き落下に見入る人  
日の本の月で餅つき兔かな

深沢りこ

山小屋の吾子が指差す流れ星  
庭さきの鉢の五花秋めきし  
古民家の長き歴史や花芙蓉  
秋の夜の一人コーヒー喫茶店  
秋の夜の姉の電話は一時間

武田重子

星月夜君は何処か瞳濡る  
めぐり逢ふ式部の恋や星月夜  
藪枯らしズツクにまつはりスニーカー  
縁台や暮れのひとつ星月夜  
藪枯らし凌ぐ野草は生き延びる

さいたま 落合和枝



青ぶだう一つぶ甘き口の中

藤岡 加藤ナヲ子

父植ゑし仏間明るく青みかん

夕映えの空におよぐよ赤とんぼ

草の中家の中まで虫の声

秋彼岸父の好みし青野菜

障子越し帯の解くる秋燈

書いて消すまでも出さずに秋ともし

岸辺より削り取られし泡立草

基礎跡に一人佇み泡立草

せせらぎの音に包まるる秋ともし

秋彼岸いつものカフェのきしむ椅子

「彼岸」には「彼岸」の習ひ秋彼岸

赤飯やぼつりと噛みし黒胡麻を

ごまを擦り鉢を持ってよと母の云ふ

由緒ある銀杏の大樹根を張りて

鉦叩すはご先祖のお戻りや

機縁あり迷悟の窓に翳雲

花の名は屁糞葛と君は笑む

小鳥呼ぶ母の手の上七竈

さいたま 今西 操

大熊道郎

編笠にちらと白きほほ風の盆

髪切りて心おだやか三ヶ月夜

秋風と共にふみ出す試歩の杖

敬老日ぢぢ参観のかけっこかな

斎の庭に鹿威しの音秋澄みぬ

北窓にそよぐ斑入り葉秋澄めり

溪流の釣竿の先赤蜻蛉

とんぼ玉何でとんぼと赤蜻蛉

この夏は介護用品試す日々

白シャツに金の刺繍ギリシヤ地図

江ノ電の線路の軋み夏の果て

家庭不和一人暮しにこの酷暑

何故何故と野分を恨む能登の声

方角を変へてくれなむ野分かな

幹に触れ後で見上ぐるさるすべり

一本で移ろふ季節吾亦紅

一茶忌の保護猫と犬むつまじく

冬ぬくし妣を抱きたる里の山

冬桜昔の我をとり戻す

父無くも我を励ます秋の雲

世の中や辛くもがなばれ秋の雲

父亡くも恩師の清し秋の空

鬼石 榊原聰子

さいたま 前田夏野

藤沢 小島喜代子

さいたま 小田三茅

所沢 関根千恵

藤沢 藤田寛二

# 作品鑑賞

## 山本鬼之介

村里に秋の灯ひとつまた一つ 反町 修

都市の近郷では、田畑や草地の宅地造成が進み、童謡に歌われていたような昔の長閑な景色が、人々の目から遠のいてしまったように思えるが、所によつては、掲句の様な日本の原風景を思わせる景色に出会えるのだという喜びを覚えた。

秋の釣瓶落して午後五時を過ぎると山に陽が沈み、西の空が茜に染まる。稲刈りの終わった田圃や大根・白菜・人参・里芋などの畑の間に人家が点在する村里の夕暮時であるが、山の麓の巢へ帰る鴉の鳴き声や、長く余韻を残す梵鐘の音も趣を添える。

小高い場所から夕景を一望している作者の目に、あちらに一つ、こちらに一つ、そして、かなり離れた所に二つ三つと灯が点る。夜の淋しさを覚える季節ではあるが、灯が増える度に心の温みが増してゆくように感じる。

句を流れる流麗なリズムと、「ひとつ」のリフレインが、簡素な内容をじんわりと読み手に伝えている。

秋澄むや枯山水の礫の波 岡田宣子

「枯山水(かれざんすい)」は、「平坦な土地に水を用いず石や砂によつて山水風景を象徴的に表現した庭園」と定義されているようだが、この文字と読み方が定着したのは、大正時代以降で、歴史的には、「乾山水」「唐山水」「古山水」などの表記や「枯山水」の読み方も「かれせんすい」「ござんすい」など色々であったらしい。そして、現在のような枯山水の様式が確立したのは室町時代中期らしい。

この俳句の「礫の波は」、花崗岩が風化した砂や、白い花崗岩を砕いて粗い砂状にしたもの(一般的には「砂利」と称するもの)に庭師が箒や熊手・レーキを使って波目や渦の模様(総じて「箒目」という)をつけたもので、枯山水にとつて不可欠な要素である。ちなみに「箒目」の「波模様」には、漣・うねり・片男波・網代波・青海波がある。

枯山水の鑑賞は、四季それぞれに趣があるだろうが、大気の澄んだ仲秋から晩秋にかけての古刹の庭園はまた格別なものだと思ふ。

棟上げの檜の五寸金糸草 飯田忠男

日本の木造住宅における柱の太さは、一般的には三・五寸(105mm)と四寸(120mm)であるから、五寸柱ということかなり

贅沢であり且つ頑丈な家ということになる。そして、その材が檜であるから自ずと注文主の経済力も判ってくる。今時は、本格的な日本建築の家が建つこと自体が珍しいし、昔ながらの「上棟式」を体験する機会は滅多に無い。五寸角の檜の柱を使う家であるから、さぞかし盛大な式なのである。

季語「金糸草」は「水引の花」のことで、贈り物の包装に用いる「水引」を思わせる花であるから、新築する家の敷地内かその付近に咲いていることを想定すると、なかなか目出度い俳句として鑑賞できる。

### 秋の蝶 砂丘の空へ吹かれ行く 小林京子

「砂丘」から「砂漠」へイメージが広がり、そして、童謡の「月の砂漠」に繋がってゆく。しかし、砂丘と砂漠は似て非なるもので、砂漠の成因を識るとこの歌のロマン性が喪われ、「月の砂丘」の方が良さそうに思える。さて、日本国内の砂丘と言えば、先ず一番に挙げられるのが「鳥取砂丘」で、これに山形県の「庄内砂丘」と鹿児島県の「吹上砂丘」を加えて観光の出来る「日本三大砂丘」になっていることを識った。鳥取砂丘の面積は五四五ヘクタールもあるから、駱駝に乗って明月を眺めるのも一興であろう。

さて、本題は駱駝ではなく小さな小さな蝶である。秋蝶であるから飛ぶ力も弱く、砂丘を吹き渡る風には一溜りもない。

折角はるばるやって来たのに、哀れ砂丘の空へ吸い込まれてゆく秋の蝶である。

### 近道を下れば秋の日本海 菅原真理

筆者が日頃お付き合いしている水明会員の中には新潟県の出身者が多い。自分が勤務していた会社の工場が、新潟県の胎内市（旧・新潟県北蒲原郡中条町で、此処は高田馬場の決闘と忠臣蔵で名を馳せた堀部安兵衛の出身地・新発田市と、三面川の塩引き鮭で識られている村上市の間）に位置する）に在るので、新潟とは馴染み深く、新潟の出身者とは話が合う。さて、作者が眼を輝かせた秋の日本海の絶景の場所は何処なのだろう。新潟県の面積は、一、二、五八四km<sup>2</sup>で全都道府県で第五位の広さであり、北西にかけて日本海に面した距離も長いので特定し難い。筆者は、以前顧客の接待で村上市の瀬波温泉を何度も訪れたが、或る日の朝の散歩で、たまたま温泉街の坂道を下った時に、展開した日本海を一望し、前夜の酔いも吹き飛んで感激した想い出がある。若しかして作者が見た場所と同じであれば、実に偶然なことであり、またまた話が弾むことになるだろう。

### 延べ段の影を拾うて白桔梗 清水桂子

聞き慣れない「延べ段」について辞書で調べたがよく理解

出来ず、専門書で詳しい説明や写真を見て納得した。「延段」は、飛石・敷石と共に「石の歩道」を形成するもので、その中で歩き易さと趣を兼ね備えたものと説明されている。更に勉強したのが、延段には「真」「行」「草」の三種があり、これは書道の「真書」「行書」「草書」の考えからきているもので、京都の「桂離宮」にはこの三種の延段があることなどである。本句の句意は、「延段に沿って白桔梗が植栽されていて、清楚な花が延段を歩く人の目を和ませている」と言う句意かと理解したが、中七の「影を拾うて」が、控え目な花の特性をさらりと表現している。

ぬくもりの恋しき腕霧の古都 霜多光代

京都かそれとも鎌倉か。そのむかし、胸を焦がす相手と歩いた古都の道であるが、時を経た今、霧の夜道を独り淋しく歩いている初老の女性を思い描く俳句である。あの時、吾がかいなを確り抱えてくれたひとの腕の温みを思い出しながら歩を進めるその人に、街灯を包む夜霧が濃くなってゆく。

こざつぱりと古暖簾そよぎ処暑の風 寺町知子

数年使ってきた自宅の暖簾か。猛暑の夏と厳しい残暑の日々が過ぎ、朝晩に秋の気配を感じるようになった処暑。掛かっていた春夏用の暖簾を去年洗濯して仕舞っておいた秋冬

用の暖簾に替えたら、処暑の風が暖簾を迎えた。

味噌蔵の裸電球法師蟬 池田瑠子

造酒屋の酒蔵と同様に歳月を物語る味噌蔵の壁や柱に麴菌が棲み着き、特有の匂と霧囲気を醸している。そのような蔵には、昔ながらの裸電球がよく似合うし、麴菌も安住しておれるのだろう。蔵を包み込む屋敷林では法師蟬が声を振り絞り、残暑の午後がゆっくりと過ぎてゆく。

宿坊の夜明けは早し霧襖 篠崎紀子

高野山や善光寺などの宿坊を思い浮かべると掲句の文字が形となって浮かび上がってくる。前夜の精進料理と般若湯で心地好い眠りを貪っていたのに、朝六時からの勤行に駆け出され、欠伸を噛み殺して列座している。寺院を取り巻く山霧が幽玄な趣を成している。

献灯のほむら掻き消す黍嵐 菅原卓郎

献灯は、神社や寺院に奉納された灯明のことを言うが、本句の場合は、何となく本殿から離れた場所にある末社のそれであるように思える。その理由は、季語の黍嵐から伝わってくるアウトロー的な雰囲気から感じるもので、蠟燭を点す行為を待っていてすかさず吹き消す悪たれ小僧のような黍嵐で

ある。換言すれば、江戸時代に代官地の宿場で悪さをしたやぐざ者のようでもあるが、本来は、上州や近隣にその名を轟かせた國定忠治のような風なのである。

秋の昼日の絡み合ふ奥座敷 皆川更穂

この家における奥座敷の配置にもよるが、奥座敷が庭に面していて、他方向に窓が在るとすれば双方から光がはいることになるから、「絡み合う」という表現が成り立つのではないかと思う。また見方を変えれば、直射光線と反射した光線の絡み合いとも受け取れる。

秋雨や夜のマイセン置時計 阿部幸代

名実ともに西洋白磁の頂点に君臨するマイセン。珈琲や紅茶などのカップを主流とする食器類に加えて、掲句に詠まれている置時計もマイセン磁器の重要なジャンルになっている。古い時代の物には、オークションでかなりの値が付くことを識った。作者の手許にある時計はどのようなデザインなのだろう。可愛いエンゼルが乗っているものか、薔薇で飾られたものか。秋のぬか雨が閑かに窓辺を濡らす夜、華麗な置時計が就寝の時を告げる。

竹輪麩のやうな女と酌む新酒 森下山菜

おでんの具になる竹輪麩。それに似た女を想像すると、扱

いにかなり梃摺ることが予想されるし、酒が扱めばなおさらである。ああ、くわばらくわばら…。

新涼や夜をあやなすブレリユード 丸屋詠子

日中はまだ暑さを感じることもあるが、朝晩は気温も下がり、秋の到来を感じる新涼である。そのような夜に聴く軽やかなブレリユードは、身も心も揉みほぐしてくれるようで、安らかな就寝に導いてくれることだろう。

毬栗を踏み込み胸の底の澱 遠藤人美

栗の木から毬栗を落とす、中の栗を取り出すのは抵抗ないが、栗の木の近くの道を歩いていて、落ちていた毬栗をうっかり踏んでしまったら、きつとこんな気持になると思う。

突出しは里芋と烏賊老女将 新 曆文

八十歳を超えたような女性が一人で切り回している小料理屋だと思ふ。女将の手作り料理が評判で、今日の突出しは里芋と烏賊の煮物。地酒を啜り里芋をつまむ馴染み客である。

葡萄の実五つ並べて水彩画 畑宮栄子

葡萄の房から五個挽ぎ取り、それを一列に並べたのが画材であるのか。簡素過ぎると思うが、一個一個を細かく観察すると微妙な違いがあるかも知れない。どんな絵になるのか。

# 水琴窟 (水明集十月号鑑賞)

池田雅夫

山開き富士山頂へひかり道 竹澤和子

富士山の「山開」は七月一日。御来光を拝もうと、深夜から登山を開始し、ライトを点けてゆく人の行列が遠くから見ると「ひかり道」となって浮かぶのである。それにしても、軽装や無計画で無謀な富士山登山には困ったものだ。

アスファルトの憤怒を癒す散水車 湯浅 和

炎天下の「アスファルト」は灼けるように熱くなり、時にはふにゃつと軟らかくなることもある。それを「憤怒」と詠んだのだ。その憤怒を「鎮める」かのように「散水車」がゆっくりと通っていった。堅固な路面に戻り安堵しているのだ。

夏空へ前掻き深し競走馬 北山建治郎

「競走馬」であるから前脚を高く挙げ嘶くことはないだろうが、夏の真っ白な雲に向かって翔んでみたいのであろう。勇壮な馬の形容を「前掻き深し」として適格に表している。

万緑や哺乳瓶持つもみぢの手 杉浦千祐

中村草田男の〈萬緑の中や吾子の齒生え初むる〉が初まり

の「万緑」。それを踏まえて「哺乳瓶持つもみぢの手」を詠んでいる。万緑のみずみずしさと乳児のもみぢのような手を対比させ、「若楓」を連想させるように工夫している。

体から悲鳴の様な蟬の声 桐山遊童

それぞれの蟬によって鳴き方が異なり、みんみん蟬やにいい蟬などと、鳴き声で名がついているものもある。「体から悲鳴の様な」声で鳴くのは、もしかすると、蟬を捕まえたときのけたたましい鳴き声ではないかと気づいた。納得。

雨上がり光る地塘に水すまし 播磨 進

「地塘」は「池塘」とも書く。湿原の泥炭層にできる池沼である。また「水すまし」は「水馬」の「あめんぼう」と「水澄」の「まいまい」のどちらにもいう。本句は、「水馬」であろう。「雨上がり」の水面に水馬も光っている。

螢火に思はずハモる小声かな 秋谷風舎

「ハモる」の語源は「ハーモニー」であろう。今は動詞として周知されている。幻想的な「螢火」を目にして、「ほ〜ほ〜ほたる来い」と口遊んだ。「小声」に趣が感じられる。

びつびつびつ目覚しとなる四十雀 駒谷行雄

「びつびつびつ」を「びつびつびつ」と読むのか迷ったが、「四十雀」なので、「びつびつびつ」が正解だろう。早朝に民家の近くの木などでよく鳴いている。その声で目を覚ますす至福の暮らしである。最近は何よりも四十雀を多く見かける。

流れ灯や螢十日の恋に生く 前田夏野

明滅して飛び交う螢の光を「流れ灯」と表現した特異性におどろいた。雌を求めて夜に光を放って飛び、「十日」ほどの命を懸命に全うするのだ。「流れ灯」が時の流れを表わし、独創的な発見である。読んだときの流れもよく申し分ない。

若竹の夜風に戯るる葉音かな 篠原さよ子

筍は数日で生長し若々しい竹になり、浅みどりの初々しい葉を広げる。竹林をもつ旧家であろうか。そよ吹く夜風を樂しむかのようにさらさらと音をたてながら小さく、ときには大きく揺れる。「夜風に戯るる葉音」に至る経緯を慮る。

履き慣れぬ下駄にそぞろや浴衣の子 木谷葉子

「そぞろ」が要になっっている。「なんとなく」や「おちつかないさま」を表す「そぞろ」。「履き慣れぬ下駄」に苦戦している「浴衣の子」の姿が目には浮かぶ。観察が効を奏す。

花束に主役のダリア母の手に 緒方みき子

色とりどりに大きな花が咲きつづく「ダリア」。華やかな花を剪って供花にもされる。ダリアを中心にした「花束」を母に贈ったのである。何かのお祝いであろうか。「八十寿」とか「米寿」などのように具体的に知りたいものである。

大漢口いつばいにかき氷 柳父はる

奇を衒うとか滑稽さをだす句に笑みをうかべることがあるが、まさにその通りである。「大漢」の風貌に似つかわしくない「かき氷」を「口いつばい」と、おどけてみせる。この夏の極暑をも吹き飛ばすほどのユーモアに共感した。

打ち来てはぶつぶつ帰り土用波 山中いちい

土用のころ、太平洋に面した海岸に打ち寄せる「土用波」。風のない日に波だけが高くうねっている。打ちつける波が何か「ぶつぶつ」と呟いているように聞こえたのだ。「多く粒だつ」や「沸騰するさま」の意に解釈してもおもしろい。

朝顔の蔓のおよげる屋根の上 飯塚智恵子

「朝顔」を日除け代わりに、窓にはわせている。屋根から網や縄を吊しているのだろう。「屋根の上」で「朝顔の蔓」は行き場を失い、右へ左へ泳ぐように揺れているのだ。



大村節代 選

鼓  
笛  
集

一夜明けすべては過去に秋の風  
前を向く過去はさておき秋祭  
秋の夜の相身互ひのベンチかな

元田亮一

桐の実のかさと音するかくれんぼ  
刑法の教授の庭に鴉の糞  
師を辞すに郁子の実一顆たまはりぬ

森下山菜

新米の輝き放ち食進む  
コスモスに触れて通うは登校日  
秋郊や素通り駅の花乱れ

篠崎紀子

暁光の粒を巡るや菌狩  
十六夜のたとへば嘘の種明かし  
旅立ちをひたと躊躇ふ秋の蜂

皆川更穂

柿ふたつ採れば我が手に陽のぬくみ  
秋雨の窓打つ粒を小半時  
長き夜頑ゆゑの悔ふたつ

清水桂子

秋灯し人影動く町工場  
蘊蓄に始まる夫の走り蕎麦  
十三夜艶の深めるお六櫛

森美枝子

照らされて目礼交はす良夜かな  
虫時雨無言のスマホとにらめつこ  
鈴なりの石榴隠すや長屋門

寺町知子

理不尽な言葉の増えし秋の町  
秋の夜やストレッツ後の立ち姿  
古民家の脇に陣取る金木犀

畑宮栄子



丸出しの訛阿吽の芋煮会  
挽ぐ挽がぬ魂胆試す葡萄かな  
花街に江戸の趣菊人形

商店街守る案山子はシヨウヘイ似  
柿の木の脚立になびく介護服  
人住まぬ庭に三本曼珠沙華

秋の夜も心解けて太極拳  
夫の通院に付き添ふも幸秋うらら  
十月や友らと集ふ吾が美術展

江ノ島の近くに越すや秋高き  
中秋や八丈島の友を訪ふ  
秋灯下父母が居て弟妹も

香田裕誌

樋口元美

関谷多美子

高原和子

## 鼓笛集作品評

大村 節 代

一夜明けすべては過去に秋の風 元田亮一

前日何があつたのであろうか。よほどの事があつたのにながらない。しかし秋の夜長に何も考えずに、ゆっくりと眠れば、あれこれと、くよくよ考えていた事が阿呆らしく思えてくる。そう、人は眠る事によつて精気を取り戻し、新たな困難へ対処する。

桐の実のかさと音するかくれんぼ 森下山菜

初夏に紫色の花をつける桐、秋には多数の平べったい実を散らす。その実を踏んでかくれる子か、それを見つける鬼役か。何れにしても近頃、都会ではお目にかかれない平和な景である。

新米の輝き放ち食進む 篠崎紀子

今年米不足で、「令和の米騒動」と毎日のように報道された。新米が出まわり、値段はともかく、やっと不足は解消されたようだ。それにしても掲句のように、日本の新米は何とも美味で、食が進む。体重計がいささか心配だが…。

☆ ☆

鼓笛集巻頭（十一月・十二月号）

私の好きな一句（自句自解） 反町 修

秋麗や亀に肖る長寿会

秋の麗らかな日に散歩をしているとある老人ホームの玄関に亀の大きな置物が飾られていました。鶴は千年亀は万年と言われています。この置物は亀に肖り長生きしたいという入所者の願いを象徴していると思ひ詠みました。

来年八十路を迎える私も長寿ということを考え始めていますこの頃です。

誤植訂正

十一月二十月号に誤植がありました。慎んでお詫び致します。

○二頁 正 第一一三〇・一一三二号

誤 第一一三〇号

○八十頁

正 独り身を通す女将や秋裕  
誤 独り身を通す女将や秋祭

○八九頁

正 墓仕舞ひ洞より出づる秋の蜂  
誤 墓仕舞ひ洞より出づる秋の蟬

特集 才智煌めく巳年の俳人たち

特別企画 金子兜太展座談会「兜太作品の原点を語る」

高野ムツオ・高山れおな・佐藤文香

新春特別作品20句 高野ムツオ・能村研三・星野高士

新春巻頭作品7句

今瀬剛一・宮坂静生・石井いさお

片山由美子・井上弘美・恩田侑布子

小川軽舟・山田佳乃

俳壇

1月号

12月14日発売  
定価1000円（税込）

卷頭エッセイ  
仁平 勝

八木健進 滑稽俳壇

四季巡詠33句「第Ⅳ期」……朝妻 力・村上喜代子

新連載

二度目の俳句入門……長谷川 權  
編集室の風景……伊吹嶺俳句会

連載

季節の移ろい〜二十四節気……加古宗也  
俳人の住む町……川井城子・緒方 敬  
旧派の俳句……秋尾 敏  
知つてるようで知らない俳句用語……井上泰至

俳句と随想12か月

安田のぶ子・矢野景一

本阿弥書店

〒101-0064

東京都千代田区神田猿楽町2-1-8 三恵ビル 電話03 (3294) 7068 振替00100-5-164430

## 第八回

# 水明塾 を終えて

青木鶴城



穏やかな晴天の十一月三十日（土）に「第八回水明塾」がさいたま共済会館にて開催されました。今回は午前の部を網野月を講師の全句講評講座、午後の部を秋尾敏講師を迎えての講演を企画しました。

午前の部の全句講評講座には二十八名の受講者が参加、各々からの二句の五十六句について網野月を講師の講評と、パネリスト四名（山本主宰、保坂翔太、曲淵徹雄、青木鶴城）の句評や添削を交え楽しい雰囲気の中、作者の作意に対する表現の良否など意見の交換が行われ、終わりに受講者を代表して受講者最年少の吉川拓真さんより謝辞を頂き全句講評講座を終了しました。昨年からはじめたパネリストは鑑賞の広が

りと受講者との距離を縮める意味で大変好評の様でした。午後の部講師の秋尾敏氏は「軸」の主宰で、現在現代俳句協会副会長。一九九一年には第十一回現代俳句評論賞を受賞された俳句界の論客で、主に江戸時代の後半から昭和初期の俳人やその時代の背景を研究されている様です。

講演は「境涯俳句と写生句」のテーマ。「境涯俳句」とは作者の人生・境涯に根ざした俳句で、病氣・逆境・貧困・差別などを詠うもの、「写生句」とは、表面は簡単な叙景叙事であるが、味わえば味わう程内部に複雑な光景なり感情なりが寓されているもの、との前置きのもと、正岡子規の「鶏頭の十四五本もありぬべし」の句を取り上げて、斎藤茂吉、高浜虚子、志摩芳次郎、西東三鬼、山本健吉、大岡信がこの句をどう鑑賞したかに焦点を当ててテーマを追求。「俳句は読み方で決まる。」として境涯で読むのか写生で読むのか、また文献学・韻書批評・鑑賞・解釈・マルクス主義的受容・実証主義・分析批評・文芸学・作品論・構造主義・ポスト構造主義・作家論で読むのか様々なアプローチを紹介されました。

まとめとして、境涯俳句は社会が変化し貧富の差が拡大する時代に繰り返し現れる。多様性への認識が高まっている現在、障害や性差をはじめあらゆる既成の認識が脱構築されていく中で、従来境涯と認識されなかったものが、境涯と認識されていく事もある。虚子が「表面は簡単な叙景叙事であるが、味わえば味わう程内部に複雑な光景なり感情なりが遇されている。」と言っていることを取り上げ「とすれば、写生句は境涯俳句かも。」と締められました。

講演の内容の詳細については、後日秋尾敏講師の執筆が水明誌二月号に掲載されますので精読下さい。

網野月を選

山紫集

待ちかねしひとの気配や虫の闇

山中いちい

来て嬉し帰つて嬉し虫月夜

本橋稀香

都会にも灯の無き場所や虫の闇

吉川拓真

虫集く葉つば切絵の音楽会

野田静香

風に乗り肩にとびのるきりぎりす

榊原聰子

芋虫の命やはらか伸び縮み

佐々木史女

昼ちちろ能楽堂を住処とし

笹本啓子

山門の静寂破る虫すだく

篠崎紀子

虫の音や空き家しつてのコンサート

篠原さよ子

マエストロ指揮棒置きて虫時雨

渋谷さいち

虫好の吾子の凶鑑や手に重き

嶋田洋子

鳴くほどに闇のととのふ虫時雨

梅澤佐江

虫の音や瘧の告知を受けし夜

日高道を

狼の潜む気配や虫の闇

青木鶴城

マリア恋ふトニーのごとき虫の声

横山礼子

我が里に旅の帰着や虫時雨

松宮保人

不動坂我を励ます虫の声

小駒さち子

——  
以上特選

夢路誘ふラバイに聞く虫の声

清水桂子

虫しぐれ門限おくれ帰り来ぬ

高橋満耶子

虫しぐれスマートフォン発光す

下川光子

虫の音や眠りを誘ふ子守歌

武田重子

隠れ里長者の庭の虫の秋

霜多光代

虫の音や狭き庭にも恋一夜

田中章嘉

湯の街の夜を広ぐる虫時雨

菅原真理

秋高し虫も鳴くなり皺腹の

寺内洋子

魍魎もすだまもハモる虫の闇

菅原卓郎

闇の中囲む気配の虫時雨

寺町知子

ペダル漕ぎ歌の練習虫の声

杉浦千祐

馴初めの河原は今日も虫しぐれ

飛永 鼓

一年の世話に応へる虫の声

鈴木藻好

鈴虫の声きき読書夜明かな

南條さわゑ

梵鐘の声なく今宵虫の声

鈴木玲子

二人連れピタリと止みぬ虫の声

西幅公子

枕頭の虫の音文庫本開く

関谷多美子

虫の闇門扉閉めらる鍵の音

野口和子

ガチャガチャのピタリと止みし朝帰り

瀬戸雄二郎

線路の際に繁る雑草虫時雨

野村美子

『源氏』読む夜半の書室に虫のこゑ

染谷風子

日がな一日ひとり話さず虫の声

畑宮栄子

虫の声泉下の子にも届けたし

反町 修

検校けんぎょうの琴線けんせんに触る虫の声

原田秀子

病棟の裏口に聞く虫の声	樋口元美	小流の暗きに沿ひて虫の声	森川義子
虫すだく片仮名多き頭痛薬	檜鼻ことは	湖に出る秘密のこみち虫浄土	森下山菜
虫しぐれ母居る施設より呼ばれ	福田千春	虫の音を伴奏にして夕散歩	森下美智枝
千の虫鳴きて庵の静寂かな	保坂翔太	虫の音にとけ込む母の寢息かな	森美枝子
虫のこゑ慣れぬ八十路の上り口	曲淵徹雄	朝夕に草多き宿虫すだく	山岸久美子
虫の闇最終電車となりにつけり	正木萬蝶	旅立ちの姉は米寿や虫の闇	山下ユリ子
一叢をわがものにして虫時雨	松井由紀子	虫時雨念ひの重き無言館	湯浅和
時を經し鎮守の森や虫の声	丸屋詠子	バス降りて帰路の賑はひ虫時雨	横山君夫
虫時雨明かりを消して肘枕	丸山マスマ	鍵つ子の窓に灯りや虫集く	綿引まりこ
虫の声の誘ふ舞台夢うつつ	宮崎チアキ	虫の音の漂ふ宙に浮かびけり	秋谷風舎
声も嗔れ母の呼ぶ声すがれ虫	持永喜夫	虫の音や湯船で伸ばす脹ら脛	新 曆文
指揮棒は焼鳥の串虫の声	森 和子	独り居のそこだけ明かし虫の闇	阿部幸代

虫を聞く少年はファーブルが好き

荒井俱子

虫すだく過疎化の村は精気満つ

岡田宣子

東雲に囁らし切つたる虫の声

飯田忠男

指揮棒は焼鳥の串虫時雨

加藤でん治

御題目闇震はせて虫すだく

飯塚智恵子

吾子ぐづる外は青空虫時雨

川島夕峰

松風やぼつり釣宿虫時雨

池田珪子

季の乱れあれど夜更けの虫の声

熊倉千重子

うぶ声に虫の歓喜の産所かな

池田雅夫

飼ひ猫の旅立ちし夜や虫すだく

倉田星歩

不眠症の夜をなぐさむる虫の声

石川理恵

小さき虫氣象を癒やすりんりん唱

河野はるみ

出ないのか出られないのか闇の虫

石関六弦

蟲愛づる姫の知るまい虫の闇

小林京子

昼の虫菌科治療待つ整理券

石田慶子

虫の声雨降り始め静かなり

小山あつ子

夜更けて湯船にとどく虫時雨

井上玲子

並木道終バス待てば虫時雨

近藤徹平

赤く塗る足と手の爪虫時雨

内田恵子

三本立ての名画座はねてすがれ虫

梅澤輝翠

虫時雨はたと止みたる薪能

大場順子

# 山紫集作品評

## 網野月を

鳴くほどに闇のととのふ虫時雨

梅澤佐江

秀拔である。中七の「ととのふ」は作者の感性が言わしめた言葉であり、他者ならばまた別の表現、価値観が表出されるところであろう。また解釈は読者に任されている部分が多いが、虫の闇に徐々に目が慣れてきた、と筆者は解釈してみた。

虫の音や瘧の告知を受けし夜

日高道を

三十年前から比して告知の重さを云々することがあるが、それでも告知を受けた身には、人生の転機を感じ取ることになるであろう。世界観・価値観が一変する時である。その時の人間は一体「虫の音」をどのように聞くのであろうか。何時もと変わらないはずの「虫の音」であるのに、この我が身はどうであらう、と聞くのであろうか。それとも何時もとは異なる「虫の音」を聞いているのであろうか。句中には答えはない。

狼の潜む気配や虫の闇

青木鶴城

今では幻となったニホンオオカミが潜んでいるという。そ

の闇に恐怖を感じることはない。狼によって虫の声が止むことはないのである。しかしながら「虫の闇」の中にニホンオオカミの存る(潜む)ことを感じ取った作者がいる。逆説を真実とするところがまた俳句なのである。俳句での不確実表現の難解さと言うまでもないだろう。「…めく」「…らしい」などは「狼」だからこそ成功している。

マリア恋ふトニーのごとき虫の声

横山礼子

非常階段に逢瀬するナタリー・ウッドとリチャード・ベイマを想起する。ベイマのファルセットが「虫の声」だというのである。直喩表現していて、表現的にはあまりにも直截的であるのだが、かの映画をバーンシュタインの反戦思想とみれば、掲句が今の世界を密かに断罪しているようにも感じてしまうのである。

我が里に旅の帰着や虫時雨

松宮保人

長旅であったのか、それともショートトリップであったのか、句の語中からは判然としない。「帰着」とあるからは長旅であったようにも読めるのである。ということとは実際の旅というよりも生涯の心の旅であったと読むことが出来る。「我が里」では「虫時雨」が迎えてくれたのである。此処こそが「我が里」なのだ、はっと気づいた作者の心情が遺憾なく表現されている。この「虫時雨」もまた格別な聞き心地であったのであろう。この上ない安堵感が句全体から滲み出している。



## 不動坂我を励ます虫の声 小駒さち子

上五の「不動坂」は、土地土地にある名称である。急坂を意味することが多く、大八車の引手一人ではどうしても上げきれない程の急坂を言うのである。浦和宿の南端には「焼米坂」なる名称が残っている。また不動明王の祠が祀つてあることの由縁での名称もあるようだ。句の意味から筆者は前者と解釈した。虫の声を愛でる以上に「励ます」と聞き取った作者の心情がリアルである。

## 待ちかねしひとの気配や虫の闇 山中いちい

虫の集く空間にふと人の気配を感じ取ったのである。たぶん虫の声が止んだのであろう。その気配の人物が待ちかねた人物なのか、どうにかして作者には分かっていたのである。その部分をしつこく詮索するというのは野暮の骨頂なのである。全く反対に謹厳な内容なのかも知れないが、筆者などはそう読むと句の艶が増すというもので、一人悦に入り楽しいのである。

## 来て嬉し帰つて嬉し虫月夜 本橋稀香

この来客は同一人物であろうか。もしくは来て嬉しい客もいれば、帰ることで嬉しい客もいる、というような哲学的な命題なのかも知れない。筆者の友人に旧家の出身で大きなレジデンスに住んでいるドイツ人がいるのだが、その門扉のフアサードに《招かざる客も帰る時には心弾む》と刻まれている。ついその刻文を思い出してしまった。閑話休題、上五中

七は一種の至言の様でもある。既成のものなら面白くないのだが、作者の個性が発揮されている言葉であるところが肝である。

ところで二つの季語を合成したような「虫月夜」という季語が成立しているかどうか不確かであるが、作句の工夫としてこういう季語の使用もこれからは模索していくことになるのであろう。成功例を多出したいと考える。

## 都会にも灯の無き場所や虫の闇 吉川拓真

都会という空間の特性を逆手にとつての上五中七の「都会にも灯の無き場所」という言い回しを「：や」切れ字で留めてリズムを中断したところに、その解答のように座五の「虫の闇」を据えている。視覚の届かないところでの耳からの感覚に集中している。元々夜行性の哺乳類のDNAが保持している感覚を俳句の感性として蘇らせているような作品になっている。

## 虫集く葉つば切絵の音楽会 野田静香

いわゆるアヴァンギャルドな句作りと水明的な句意の統一感を重要視する風とを盛り込むことに成功した作風である。秋の夜の虫の音を音楽会と描写しながら、その音楽会をこれも秋の景の特徴の一つである葉葉の形態と織り交ぜて表現している。虫の音の経糸に葉葉の景の緯糸を織り合わせているのである。聴覚的感覚と視覚的感覚を盛り込むことで、伝統的な水明句としての風情と作者の個性を見事に一致していると言つて良いだろう。

# 水明例会

## 第一例会（浦和）

茂木和子  
小林京子 報

火焰土器の放つ勢や秋高し  
大西風に靡くうながみ放ち駒  
跡継ぎに譲る母屋や夕紅葉  
高樓を燃やすが如く夕紅葉  
紅葉山入らば鬼女にもなる齡  
猪に放つ一発甲斐の山  
やつと解放病みの柵より秋の空  
放たれど神の意のまま秋の蝶  
錦秋やダム放水の水立つる  
紅葉のトンネル抜けて松一樹  
放たれし牛が耳振る秋の蜂  
庭先に鍼力のバケツ柿紅葉  
この峰を越ゆれば筑波妻恋草  
放課後の掃除当番小鳥来る

マスミ 卓郎 喜恵 はるみ 由紀子 京子 和葉  
以上特選 拓真 稀香 はるみ 由紀子 延昭 京子 喜恵

## 第二例会（東京）

山中みどり  
青木鶴城 報

折角の紅葉薄らふ雲出でて  
分水嶺に濃淡分けて櫛紅葉  
奥宮へつながら古道初紅葉  
せせらぎを友に旅寝や溪紅葉  
溪紅葉露天湯までの下駄の音  
紅葉は頂より来る里山に  
嫁ぐ娘に母の無口や茸飯  
アルバムの若さ眩しき夜長かな  
工場にて作らるる茸もの言はぬ  
「嘘つこ」が子等の呪文よ赤のまま  
山里の宿の未知なるきのこ汁  
一灯に足りて一人の夜長かな  
長き夜の休刊になる夕刊紙  
土手に生ふ白き茸に見入る人  
飲み薬一錠増えてそぞろ葉

和葉 順子 卓郎 マスミ 和子 卓郎 マスミ 和子 順子 卓郎 マスミ 和子

長き夜点訳絵本の読み聞かせ  
生国では今や宝ぞ乳茸しほ茸買ふ  
長き夜すべて飲み込むしじま哉  
深更に寝覚め長夜を持って余し  
長き夜や昭和の時代懐かしむ  
冬仕度気のせくまに日暮たり  
秋暑し鳥居威を張る九段坂  
紅き茸闇に誘ふ森の縁  
長き夜をいくとせ経つる楠木は  
今朝会ひしあの娘の名前夜長かな  
数百円の合はぬ家計簿夜長かな  
山姥が毒茸煮て惚れ葉  
反省のしきり眠れぬ夜の長し

鶴城 以上特選 千春 士史 峰雄 敏江 笹川 しい 里子 亜弥子 慶子 みどり 鶴城

## 第三例会（東京）

五明昇報  
曲淵徹雄 報

冷やかに笑ふ彼女の片まぐほ  
星歩



当選履歴冷やかに見る籤売場

指先冷ゆ刑具の歴史ひもとけば

冷やかに曜変放つ瑠璃の艶

冷え冷えと富士の樹海の闇深し

冷やかや社殿の裏の疱瘡神

冷やかや血管探るナースの手

舷窓に秋灯揺るる船溜り

冷やかに進路未定と予報官

宿坊の今朝の茶粥や深山冷ゆ

手入れよき城蹟ひそと夕紅葉

冷やかに受診の胸を開きけり

夕冷えや大徳利は出番待ち

冷やかや靴紐少しゆるめおく

秋冷や止まりしままの腕時計

中指に残るペンだご冷やかに

冷やかや梁くろぐろと蕎麦処

### 第四例会 (浦和)

柿簾鑑ひて暮るる国境

秋寒し人体模型の手と脚と

装蹄師の革の前掛け吊し柿

軒下を鑑ふがごとく吊し柿

自販機の喋り上手やうそ寒し

うそ寒や村に伝はる神隠し

星 歩

萬 蝶

順 子

康 世

徹 雄

昇

——以上特選

星 歩

萬 蝶

雅 夫

順 子

千 祐

康 世

理 恵

徹 雄

昇

石井喜恵  
反町 修報

昇

マスミ

恵 子

修

延 昭

でん治

秋寒やまた一人逝く酒の友

千柿をそつと採む祖母茜雲

やや寒や昇降口に影長く

山の辺の入り日ははやし吊し柿

断捨離の書架のうつろやそぞろ寒

挨拶は長話へと秋寒し

秋寒し回峰行の道険し

友見舞ふ柔き千柿胸に抱き

ここち良き夜具にはほ埋む秋小寒

一村は千柿のれん伊那の里

不意を衝く腓返りやそぞろ寒

秋寒し野菜の煮込みたつぷりと

そぞろ寒太極拳の日和かな

秋小寒羅漢の膝の五円玉

切り離す連結車輛秋寒し

暦 文

以上特選

行 雄

でん治

延 昭

由紀子

光 子

翔 太

寛 治

玲 文

曆 子

昇

恵 子

修

マスミ

喜 恵

### 第五例会 (浦和)

チャップリンのごと忙しなき石叩

亡き夫へ恨み言添へ菊贈

箸躍る長寿の姉よ菊贈

余生いま贅を極むる菊贈

菊贈藍の器を揃へたる

恋をしへ鳥舞のつやめく涼

つがひ鶴鶴一声交はし翔びたてり

菊贈俄に華やぐ厨水

怪しむ路地を鶴鶴すまじゆく

若き日の母の袴もつてのほか

菊贈和へて五感の活き活きす

あざやかな黄に舌鼓菊贈

到来の越後の酒や菊贈

### 若松例会 (京橋)

八橋に爽籟を聴く城址かな

青雲の志あり頼祭忌

珈琲の濾過紙の折り目秋の風

風爽やか古地図に拾ふ屋敷跡

群青の海の御霊や冬隣

秋風に弾むボレロのリズムかな

秋風や唯一無二のひと送る

梅澤佐江  
河野はるみ

千 祐

はるみ

玲 子

義 子

佐 江

以上特選

宣 子

知 子

千 祐

はるみ

義 子

玲 子

佐 江

正木萬蝶  
石田慶子

佐 江

京 子

ひろこ

ひろこ

マスミ

鶴 城

星 歩

萬 蝶

——以上特選

京 子

稀 香

ひろこ

星 歩

千 春

千 祐

佐 江

手紙など認めてみむ秋の風  
秋風や翁像にも細道も  
秋風や商店街は更地増ゆ  
秋風を入れて仏の仕上げ彫り  
爽籟や遠くで爆ぜる不発弾

鶴城  
はるみ  
詠子  
マスマ  
萬蝶

### 関西例会（大阪）

森本早苗 報

国境なき大空わたる雁の列  
雁の棹一番星を越えゆけり  
病癒ゆ試歩にほどよき紅葉晴  
雁渡る檀那寺いま無住寺に  
揺るる影の徒手操や吾亦紅  
神妙に閉眼供養新松子  
生真面に茜空ゆく雁の列  
五島列島讚美歌黄色曼珠沙華

道子  
和子  
千枝子  
千津子  
洋子  
千世子  
人美  
早苗  
以上特選  
千津子

かりがねや美しき日本へ列をなし  
人工芝に命吹き込み色葉散る  
雁鳴くと直実ゆかりの坊泊り  
又一人戸籍に増えて秋うらら  
柿の里取材の記者の声高に  
大銀杏の結へぬ大関天高し  
雁渡る津津浦浦の母集ふ  
十月の空を伸びやかアルト笛  
蘭匂ふワイングラスを二個並べ  
幾何模様一糸乱れず雁来る  
山田錦の畦燃え盛る彼岸花

嶋田洋子  
早苗

## 昔話あれこれ 43

### 痴れ者の親王と伯父濟時

宣耀殿の女御芳子は親王（永平親王）を一人生んだ。容姿などは綺麗であったが、知的な障害があった。

村上天皇の皇子で師尹公の孫であるのに、痴れ者であったのは、不思議なことである。

時の左大将濟時卿は女御の兄で、親王の伯父であった。父師尹公より気難しく、見栄っ張りだという噂だった。

当時は廃れていた親王の主催の大饗を、伯父の濟時が親王のために催した。上達部達は無視できない親王の招待なので、大勢出掛けた。濟時は親王に「早くお帰りになる方を、

愛想よく引き留めなさいませ。」と教え込んだ。

公務で急いで帰る人を見て親王は伯父さんに言われたことを思い出したが緊張のあまり言葉が出ず、その人達に飛びついて袖が千切れそうになるほど引き留めた。人々は驚いて早々に引き上げた。親王は咎められなかったが、「濟時卿は余計な事をしたものだ」と大恥をかいた。

### 濟時の子女・城子は皇后に

濟時の子は、女君一人、男君二人。長女の城子は、三条天皇が東宮の時女御となり、男親王四人、女宮二人を生み、東宮の御寵愛は大層深くときめいていた。

東宮が即位して帝になられた翌年（長和元年・1012）城子は皇后となった。

各地句会



若 鮎 句 会 (浦和)  
 水澄めり空襲受けし跡もなく  
 先達の教へ身に沁む刈田かな  
 秋の暮四通八達街灯り  
 蓑虫や胎児は天地逆しまに  
 ほんとの空安達太良山の水の澄み  
 水澄みて災禍の姿逆映し  
 水澄みて金時を炊く夕べかな  
 蓑虫や蓑を改め六十路往く  
 みのむしの蓑にヒマラヤ杉の針  
 水澄むや心の闇に仕舞ふ嘘  
 秋澄みし三原色の鮮やかに  
 め だ か 句 会 (浦和)  
 行く秋やラツシユアワーに紛れ込む  
 デバ地下に揃ふ新酒の招き人  
 行く秋や声なき声を綴りをり  
 行く秋にばば抜きを綴りをり

若 枝 句 会 (浦和)  
 特売の太めの秋刀魚選び抜き  
 遙かなる稲波へ漕ぐ稲舟よ  
 魚屋のセンター張るや初秋刀魚  
 法務局遺言たづさへ秋深む  
 長袖を重ねる毎に秋深し  
 秋深き秩父路急ぐ一人旅  
 若 楠 句 会 (浦和)  
 暮の秋法令線の窪みかな  
 ところ蕎麦街の灯りを味はひて  
 秋の雲ビル立ち並ぶ城下町  
 永田町陣中見舞ふ新走  
 長生きに良きこともあり残る虫  
 菊日和教寄屋造りの屋敷町  
 百年の土間こそ我が家残る虫  
 諍ひの無き世を生きて残る虫  
 野 菊 の 会 (与野)  
 推し活へ高高ひらく秋日傘

和子 折鶴に晴なき夜の金木犀  
 敦子 高野経てにはかに尾根の深き霧  
 章嘉 神無月赤き朝光胸圧す  
 美津子 夕日影老いとは何ぞ吊し柿  
 月を 穴まどひ土蔵のひびり深まりぬ  
 鶴城 神戸大池句会 (神戸)  
 はるみ 故里は「庭見せ」も済み鯛雲  
 三茅 時雨月埋めやうの無き大き穴  
 みどり 水明熊谷句会 (熊谷)  
 泰子 かぐや姫に贈る振袖夜半の月  
 貞代 自分史をつづる夜長の女文字  
 泰生 秋日和黒留袖に五つ紋  
 敏江 碧眼も堂に入りたる秋遍路  
 葉子 妻と居る終の住処の夜長かな  
 操 秋遍路「砂の器」の如くゆく  
 真由美 秋遍路過去の影曳く鈴の音  
 風舎 袖の香に母の温もり秋惜しむ  
 宏治 もう二度と届かぬメール長き夜  
 直子 コクーンシテイカルチャー 俳句教室さいたま新都心  
 京子 所轄署のてかが搔つ込む走り蕎麦  
 鶴城 六弦を締め鳴らしつ秋灯  
 美代子 四万十の流れ一途に下る鮎  
 美代子 鄙の宿膳に地酒と秋の鮎  
 美代子 露けしやわれに二つの泣きぼくろ  
 美代子 朝の露のせて野菜の御裾分け  
 美代子 鯖鮎や落人村は山向かう

秋の灯や旅情を溢す露天の湯  
俳句の手ほどき (岩槻)

趾指の爪切る難儀秋さびし  
小管より秋思深むるますは貝  
奥能登の平家の里や秋思なほ

入相の鐘の尾を引く秋思かな  
秋さびし遠くとほくのひとつ星  
浮き雲が天女の顔に秋思かな

秋の朝望みつなぐる平和賞  
わが秋思リュックの底の古写真  
ゴンドラの歌朗朗と秋思かな

若き日の希望の日日や天高し  
秋懐のにぶき楯音川下り  
秋思かな肩に糠雨降り止まず

望郷の想ひ深まる秋の暮  
膝を抱く檻のゴリラを見て秋思  
円卓の会 (浦和)

母子して胎児のかたち夜寒かな  
杉の実や鉄砲好きの田舎の子  
秋の夜の星の数ほど「わり氷」

文机筆先止まる夜寒かな  
杉の実や焼き立て麺麴は旅の友  
秋深し奥羽本線終列車

信濃路や車窓満目蕎麦の花  
天気予報の雨降り出して夜寒かな  
秋澄むや高樓多き浦和宿

昇

延昭

佐江

徹平

忠男

翔太

桂子

幸代

美子

久美子

卓郎

知子

チアキ

かつ子

京子

道を

亮一

輝翠

拓真

翔太

月修

鶴城

たかんな俳句会 (川口)

ゆつくりと山下りてくる龍田姫  
秋行くや夫かたはらにゐるやうな  
言ひ訳をせぬ好漢よ冬隣

長瀬のどこにおはすか龍田姫  
行く秋や旅の終はりのレトロカフェ  
蝸 蚪の会 (浦和)

街案山子見覚えのシャツ父の服  
衆議院解散をする桐一葉  
黄金色祖父と見まがふ案山子かな

秋の暮れ三セット目のストレッチ  
腕抱へ三三五五の芋煮会  
過疎の村賑はふ百態案山子かな

誤して供ふる柿や百度踏む  
看護師のやはらかき手や長き夜  
千代紙の千羽鶴折る夜長かな

何も言はぬ師匠の遺筆色なき風  
澄み渡る導師の喝や秋の果  
異国の地民族服の案山子展

標の会 (浦和)

ナンプレの数字うめゆく夜長かな  
夜長なり誰ぞたづねてくれまいか  
能登に吹け再起の風よ竹の春

立ち飲み屋台賑はふ夜長時  
人力より手を振る嵯峨野竹の春  
六義園の床几で抹茶を竹の春

義子

のり子

小麦

謙一

鶴城

元美

しるく

さち子

幸子

秀子

夏野

風舎

礼子

ひさ子

月を

鶴城

宣子

文子

あつ子

朋子

裕志

富子

千重子

珊瑚の会 (浦和)

それぞれの昔ばなしを栗お強  
益子の里の碗の厚みや栗の飯  
秋の夜の常温よろしひとり酒

栗飯や永久に三つそのままの姉  
栗おこは越の藻塩の一撮み  
アンティークグラスにシャブリ秋の夜

秋の夜軒の寂しき奈良井宿  
秋の夜門灯しづかに点り出す  
釜飯の一番上に栗五つ

秋の夜はなし濃きコーヒーに淹れ替ふる  
一部屋を灯して暮らす秋の夜  
野ばらの会 (浦和)

人生を味はひ尽くし新豆腐  
三之助の幟はためき新豆腐  
姫胡桃思ひ出ひとつ小抽出

風を呼ぶ胡桃細工のイヤリング  
慎重にしようゆ一滴新豆腐  
若狭水明会 (若狭)

青青と拔菜尽くしの朝餉かな  
秋彼岸祖父の愛でたる能舞台  
近うても遠退く実家秋彼岸

小手柄かぬ節高指よ菜を間引く  
間引き菜の無縁塚にも香焚かれ  
新盆に猫耳たてて経を聞く

間引き菜のあとや小さき風通る

和葉

かつ子

喜恵

マスミ

昇

恵子

光子

史代

広子

和子

節代

夏江

秀子

茂子

栄子

みき子

祥子

八重子

和風

笑風

郁子

寛久

保人



間引き菜の歯触り残す塩加減  
 間引き菜やどの子もかわい子沢山  
 六方と田舎饅頭秋彼岸  
**阜月の会** (浦和)  
 秋高し通天閣は五百段  
 ふるさとの門火を撫むる通り風  
 新米の際だつ旨さ塩むすび  
 茸狩の遠くなりゆく友の鈴  
 コスモスに触れて通ふは登校日  
 吊橋の影に夕日や秋の川  
 いせ辰の藍染泳ぐ秋の川  
 底までも澄みて明るし秋の川  
 伏流水ここに湧き出し秋の川  
**雛の会** (浦和)  
 御用提灯売る浅草や秋の夕  
 大粒小粒転がり遊ぶ芋の露  
 小豆干す門を構へぬ旧家かな  
 日の匂ひ母の匂ひの小豆干す  
 七彩に物干し竿の露の玉  
 露の世を夜露に濡れて帰りけむ  
 朝の日に綺羅こぼしたる露葎  
**水明澤つくし句会** (大阪)  
 夕化粧運河の風を染め渡る  
 日本語の調べは魔法十三夜  
 竿にあるはつかな雀も雁渡る  
**鶴川山百合句会** (鶴川)

初花 鼓  
 ことは  
 山菜 更穂  
 珪子 光代  
 紀子 静香  
 曆文 美佐尾  
 きいち  
 はるみ  
 公子  
 喜恵  
 燈女  
 輝翠  
 チアキ  
 佐江  
 智恵子  
 人美  
 洋子

潮麥はり海辺の島の野菊かな  
 「野路菊」のかな女帯想ひつつ野菊  
 寝入る子に涙の跡や野紺菊  
 バス停を教へるやうに野菊咲く  
 野菊ゆらし一両ばかりの電車過ぐ  
 公衆電話のまた一つ消ゆ野紺菊  
 石壁を割つて野菊の二三本  
 どこにあれつましく強き野菊かな  
 百グラムおぼる昆布手に秋夕焼  
 不揃ひの月見団子や子に黄粉  
**青葉の会** (浦和)  
 小鳥来る去年の小鳥か親しげに  
 防風林越ゆれば碧き秋の海  
 色づきし実に早早と小鳥来る  
 朗朗と「防人の歌」秋思かな  
 一羽飛びわつと飛び立つ小鳥かな  
 小鳥来る枝に庭師の豆紋り  
 だんしやりでほとと息小鳥来る  
 小鳥来る望遠鏡の視野の中  
 彼の国の便り啜へて小鳥来る  
**さざきサークル** (浦和)  
 真向かひに阿蘇の畑立つ大花野  
 裏妙義奇岩の花野暮れなづむ  
 昔ほど鳴らぬ口笛花野行く  
 大花野居るやも知れぬ人攫ひ  
 北の海浮かぶ礼文の花野原

月を  
 史代  
 広子  
 由美子  
 千春  
 萬蝶  
 理恵  
 美千子  
 うさぎ  
 玲子  
 美紗子  
 真理  
 美智枝  
 美子  
 公子  
 啓子  
 洋子  
 和子  
 輝翠  
 昇  
 光子  
 健司  
 啓子  
 由美子

子持ち鮎子も盃も笠間焼  
 幾歲月錆びしレールの花野かな  
 落鮎の家路を急ぐ思川  
 鏑鮎の不揃ひを焼く峡の店  
**和歌山水明句会** (和歌山)  
 ままごととはよそゆき言葉小鳥来る  
 ホルン寥寥どつと駆ける鹿の群  
 長き夜や巻き戻し見るサスペンス  
 木の実落つ坂の途中の駐車場  
 やうやうに季節到来はくれ雁  
 雁や群れて飛び立つ朝の空  
 魚河岸に太き声とぶ秋刀魚漁  
 海光はうすむらさきや雁渡る  
**山茶花** (浦和)  
 つるし柿簾とならん軒々に  
 托鉢の僧の胸にも赤い羽根  
**蘭の会** (浦和)  
 精霊の爆ぜる息吹や流れ星  
 流れ星願ひもせず沈黙す  
 星飛んで今宵誰かの「グッドバイ」  
 星飛べよ戦地の空に砲でなく  
 願ひ事一つに絞れず流れ星  
 存へて我も喜寿なり蕎麦の花  
 猪討たる銃声を聞く男坂  
 生存のわからぬ友や七竈  
 星流る小瓶に拾ふ星の砂

俱子  
 和枝  
 和子  
 和子  
 道子  
 千枝子  
 千世子  
 満耶子  
 きわゑ  
 洋子  
 廸代  
 美江子  
 マスミ  
 風舎  
 寿夫  
 和子  
 伸子  
 小麦  
 風子  
 珪子  
 夕峰  
 まりこ

母の背にうつし出さるる流れ星  
 旅の夜猪鍋囲む伊那の里  
 星飛ぶや明朝に着く船の宿  
 験裏に軌跡をたどる流れ星  
 存続を危ぶむ老舗新松子  
 存へて独りの庵の夜寒かな  
 りんどう俳句会 (浦和)  
 能登風ぐや鳥渡り来る松林  
 猪を追ふこの面々が村仕切る  
 猪食うて縄文の血のふつつと  
 洞へ入る子栗鼠が落とす大胡桃  
 猪や全力疾走耳かさず  
 溪を這ふ黒部の瀬鳴鬼胡桃  
 風どどど北上川へ胡桃落つ  
 胡桃割る耳に明治のいくさ歌  
 くるみ割り忍耐力を試さるる  
 うそ寒の軒に青青酒林  
 ミモザの会 (横浜)

三千子 留美子 さよ子 月を 鶴城 京子 寛治 君夫 順子 翔太 夕峰 徹雄 風子 利子 卓郎 史代 詠子 由美子 慶子 玲子 亜弥子 栄子

秋の夜の開けたばかりの美容液  
 芽吹句会 (浦和)  
 トランペット末枯の野の黙の中  
 秋麗や亀に肖る長寿会  
 蜻蛉きて風が映りし水たまり  
 白壁に見落としさうな糸蜻蛉  
 ひとひらの花かと紛ふ赤とんぼ  
 末枯るる虫塚無音建長寺  
 独り居の窓辺群れゆく夕蜻蛉  
 晩秋の長野路ゆけば母の里  
 山の端の日差しを選びあきつ飛ぶ  
 芙蓉句会 (浦和)  
 一山の色の重なる紅葉かな  
 こそ泥の動かぬ証拠あのかづち  
 犬戻り毛の根元まであのかづち  
 柿の木塾 (浦和)  
 身に入むや地図をなぞりて北国へ  
 丁寧に道具を磨く秋起し  
 秋耕や棚田に届く遠汽笛  
 身にしむや一管の笛城址より  
 秋耕や東の筑波西の富士  
 身に入むや故郷棄て行く老夫婦  
 水耕の手足労はる仕舞風呂  
 水明鬼石句会 (鬼石)  
 秋風鈴鏝の程よき南部鉄  
 十三夜望遠鏡に見るくぼみ  
 十代の思ひ出ひとつ十三夜

千春 千重子 修 富子 チアキ 田中弘子 玲子 久美子 道を 税子 仁子 美子 節代 恵子 昇 かつ子 和葉 章嘉 和子 和子 聰子 ナヲ子

りそな俳句会 (浦和)  
 秋晴や波の穂かふる大漁旗  
 秋晴の銀座四丁目の雑踏  
 秋晴や思ひ馳せたる地図の旅  
 竹春や谷戸に流るる般若経  
 秋晴や婚の来る日の薄化粧  
 秋晴に心が弾む散歩道  
 風さそふ山辺の古刹竹の春  
 櫻蔭句会 (浦和)  
 情を炊く母のもてなし栗ごはん  
 友情の契りをかはず月見酒  
 次々と刈田の空へ熱気球  
 昏れゆきて富士の遠望刈田原  
 匂ひだけ残して暮るる刈田かな  
 落日の刈田に向かふ母の影  
 植ゑし日の歪みそのまま刈田跡  
 検査良好晴れ晴れとして刈田道  
 「めぐみさん」母の情愛秋袷  
 朝日浴び刈田降り立つ群れ鴉  
 秋のひる古本市に「ああ無情」  
 小梅の会 (浦和)  
 哀楽を見守る能登の案山子かな  
 楽といふ言葉に乗せて秋の風  
 時隔てゴッホと我の星月夜  
 赤蜻蛉山寺越えて何処にか  
 秋深しかの山川は音を消し

マスマ 久美子 寛治 道を 建治郎 勲 雅夫 久美子 千恵 行雄 多美子 真理 公子 由紀子 美智枝 茂子 美子 幸代 進 隆文 恵子 隆然 道



あゆみの会（浦和）  
 秋晴れに心躍らせ山歩き  
 大寺の朝の勤行小鳥来る  
 校庭に流るるマーチ秋うらら  
 小鳥来る木立の中の夢二館  
 秋晴や門の仁王が伸びをする  
 ビル街の狭き青空秋の晴  
 新樹の会（浦和）  
 秋しぐれ芭蕉を追うて陸奥の旅  
 秋の山入相の鐘樹々の間に  
 大海の入り日に燃ゆる秋の山  
 溪流の紅く染まるや秋の山  
 三陸の海を照らすや夜半の月  
 焦がれあふ男体女体秋の嶺  
 陸墨の歪み気になる冬隣

山遊 啓子 俱子 重子  
 藻好 風子 道修 平通 清吉 徹雄 鶴城

毎月25日発売  
 定価1000円(税込)

# 月刊俳句界 2025年1月号

**特集**  
**山と俳人〜大地と生きる**

- 山と日本人 鈴木木正崇（慶應大学教授）
- 山と俳人 前田普羅…中坪達哉
- 杉田久女…坂本宮尾 飯田龍太…
- 井上康明 金子兜太…田中亜美
- 成田千空…横澤放川
- エッセイ…山歩きで見えて来るもの
- 広渡敬雄 鈴木久美子
- 山を詠む 小澤實 岩岡中正

特集 **やまとことばの魅力**

- やまとことばの魅力 吉田裕子
- やまとことばが句にもたらす効果
- 岸本尚毅 名取里美
- 意識的にやまとことばを取り入れた句
- 今橋真理子 天野小石
- 天田牽牛子 南十二国

投稿欄選者新春競詠

タラビ〜俳句界NOW 渡井一峰

【注目の句集】 碓井真希女『佳き人に』

- 藤原暢子『息の』
- ★新連載 「評伝小野燕子」 栗林浩
- 「俳人の本棚」 川越歌澄

「俳句界」投稿欄 一流選者11名！  
 充実の投句欄

※一部変更の可能性があります。  
 株式会社 文學の森 株 求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F  
 TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

# 令和7年度「例会・句会指導者 および幹事の会」開催のお知らせ

一昨年より指導者および幹事の会を再開し、水明俳句会の運営等にご理解が深まり、運営面がスムーズになったことと存じます。

令和7年におきましては「水明創刊95周年記念全国大会」等もございますし、また例年のように水明俳句会の組織としての在り様を皆様と再検討して、水明俳句会の更なる発展のための施策などの討議もいたします。

万障お繰り合わせの上、ご出席ください。

## 記

- ◆日 時 令和7年1月31日(金) 10:00 (09:30 受付)  
約1時間半を予定
- ◆会 場 浦和コミュニティセンター10F第13集会室  
(JR浦和駅東口前パルコ10階)
- ◆議案など
  - ・水明創刊95周年記念事業について
  - ・令和7年度の年間事業計画について
  - ・各例会、各句会の現状報告、および情報交換
  - ・例会、句会の会場・時間などの変更事項の報告について
  - ・水明集および他の応募句等の投句方法について
  - ・その他

※欠席の場合は、総務部宛に連絡をお願いします。なお代理の出席をお立てください。

※会では句会毎のアンケートを予定しています。

①水明誌友・同人・季音同人以外の出席者の有無、②各地句会報欄への取組、③その他の連絡事項などございましたら、事前に取りまとめてご出席ください。

※当日は午後から「新春俳句大会」が開催されます。併せてご出席ください。

令和7年1月

水明主宰 山本鬼之介  
水明副主宰兼運営幹事長 網野 月を

## 新春俳句大会のご案内

- [日 時] 令和7年1月31日(金) 12時 受付  
12時30分 投句締切
- [会 場] 浦和コミュニティーセンター第13集会室  
(JR浦和駅東口前パルコ10階)
- [投 句] 「寒の水」(傍題は「寒水」のみ可)  
「福寿草」(他の傍題は不可)  
各1句
- [参加費] 1,000円
- [申 込] 1月20日(月)までに会費と申込書を添えて発行所総務部あてにお願いいたします。

年当初の新春俳句大会です。日時をご確認の上、奮ってご参加ください。  
※当日は昼食の用意はありません。飲み物は各自でご持参ください。

事業部

# 俳句

1月号  
予告

12月25日発売

予価1,200円(本体1,091円)@

## 新年詠7句・新年詠10句

2025年からポリニュームアップ!  
豪華! 総勢70名以上! ●エッセイテーマ「小さな変化」

星野 椿	宮坂 静生	西村 和子
矢島 渚男	大 申 章	正木 ゆう子
宇多喜代子	高橋 睦郎	片山 由美子
池田 澄子	大木 あまり	長谷川 權
今瀬 剛一	中村 和弘	小 澤 實
岩淵喜代子	高野 ムツオ	小 川 軽舟

「俳句」誌上令和初!

## 新春特別即詠句会2025

坂本宮尾×伊藤伊那男×望月周×和田華凛×生駒大祐

合評懇談(新メンバー)……守屋明俊・山西雅子・黒岩徳将

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売!

電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団

発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

## 令和7年 新珠賞作品募集

水明新人賞である新珠賞作品を下記の要領により募ります。  
新人登龍門の主旨をよく理解されて多数のご応募をお待ちしています。

- 応募資格** 季音同人を除く同人・誌友
- 応募句** 未発表作品：15句(表題を付す)  
水明集・句会報等「水明」誌及び外部に発表した作品は不可。
- 締切** 令和7年2月末日(発行所必着)
- 応募方法** 令和7年水明1月号に応募用紙添付

### 水明忌のご案内

- [日時] 令和7年2月24日(月) 12時 受付  
12時30分 投句締切
- [会場] 浦和コミュニティーセンター第13集会室  
(JR浦和駅東口前パルコ10階)
- [参加費] 1,000円
- [申込] 2月1日(土)から受付開始。17日(月)までに会費と申込書(2月号に添付)を添えて発行所総務部あてにお願いいたします。

「水明忌」は、長谷川秋子(第2代主宰)、星野紗一(第3代主宰)、星野光二(第4代主宰)の忌を修する日です。日時をご確認の上、奮ってご参加ください。

※当日は昼食の用意はありません。飲み物は各自でご持参ください。  
兼題などの詳細は2月号に発表いたします。

事業部

## 水明創刊 95 周年 記念祝賀会・全国大会のお知らせ

### ■記念全国大会

- 日 時 令和 7 年 9 月 28 日（日曜日）  
会 場 ロイヤルパインズホテル浦和  
〒 330-0062 さいたま市浦和区仲町 2 - 5 - 1  
行 事 ・水明賞、季音賞、かな女賞、新珠賞、鼓笛賞、山紫賞  
の表彰  
・季音昇欄同人、新季音同人、新同人への委嘱状授与  
・大会記念作品の表彰（俳句、評論、エッセイ）  
・大会兼題句の入選発表、表彰、講評

### ■記念祝賀会

- 日 時 令和 7 年 9 月 28 日（日曜日）  
会 場 ロイヤルパインズホテル浦和  
〒 330-0062 さいたま市浦和区仲町 2 - 5 - 1  
行 事 ・来賓挨拶（高野ムツオ現代俳句協会会長）他  
・アトラクション他

※大会・懇親会の時間および参加費等の詳細については改めて  
ご案内致します。

## 春の吟行会のご案内

[日 時] 令和 7 年 3 月 30 日(日)

[と ころ] 本所ビッグシップ

投句数および投句締切時刻、会費、申込書など申し込みの  
詳細については、次号 2 月号にてご案内申し上げます。

主担当 第 2 例会、支援 事業部

## 水明の運営組織 (令和7年1月1日より)

主 宰 山本鬼之介

副主宰兼  
運営幹事長 網野月を [渉外関係用務、編集企画用務]

編 集 長 大村節代

常任運営幹事 網野月を 大村節代 石山かつ子 石井喜恵  
日高道を 青木鶴城 菅原卓郎 小林京子

監 事 [水明俳句会及び水明発展基金の会計監査]

山中みどり 新 暦文

運営幹事 大橋廸代 檜鼻ことは 町野広子 近藤徹平

### 各 部

総務部 [会計、会員に関する管理事務、各行事の受付事務、水明誌等の発送、発行所管理ほか庶務全般]

部長・日高道を 石井喜恵 菅原真理  
岡田宣子

事業部 [水明俳句会各行事の企画・運営・実行、地方支部会員との連携、新規会員拡充の企画・運営・実行、ホームページの企画・運営・実行、俳句教室の企画・運営・実行、会員研修の企画・運営・実行、広報活動の企画・運営・実行、渉外関係用務、編集企画]

部長・青木鶴城 河野はるみ 小林京子  
吉川拓真 菅原卓郎 皆川更穂

編集部 [水明誌発行、全国大会資料の校正、水明誌の発送、その他編集関連用務]

部長・大村節代 石山かつ子 丸山マスマ  
大塚茂子

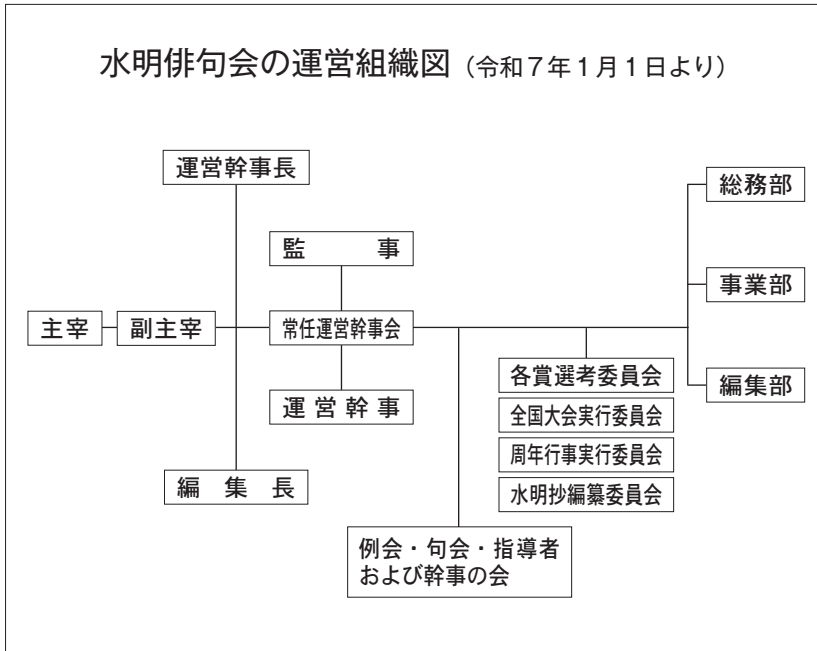
## 水明発展基金役員 (令和7年1月1日より)

会 長 山本鬼之介

幹 事 網野月を 大村節代 日高道を 石山かつ子  
石井喜恵 青木鶴城

監 事 山中みどり 新 暦文

## 水明俳句会の運営組織図（令和7年1月1日より）



## 水明俳句会各賞選考委員会（令和7年1月1日より）

<b>水明賞</b>				
主宰	副主宰	大村節代	石山かつ子	石井喜恵
	日高道を	青木鶴城		
<b>季音賞</b>				
主宰	副主宰	大村節代	石山かつ子	石井喜恵
<b>かな女賞</b>				
主宰	〔副主宰と編集長の同意を得る〕			
<b>新珠賞</b>				
主宰	副主宰	大村節代	石山かつ子	石井喜恵
	日高道を	青木鶴城		
各地区委員：大橋 廸代    檜鼻ことは    永野史代    五明 昇				
<b>鼓笛賞</b>				
大村節代    〔主宰と副主宰の同意を得る〕				
<b>山紫賞</b>				
副主宰    〔主宰と編集長の同意を得る〕				

# 令和7年主要年間行事等予定表（案）

令和7年1月1日

行事名	日程	誌上案内	開催場所等	主担当	支援
新春俳句大会	1月31日(金)	1月号	浦和CC第13集会室	事業部	
例会・句会指導者および幹事の会	1月31日(金)	1月号	浦和CC第13集会室	常任運営幹事会	事業部
水明忌	2月24日(月)	1月・2月号	浦和CC第13集会室	事業部	
春の吟行会	3月30日(日)	1月・2月・3月号	本所ビックシッ	第二例会	事業部
水明夏行	(予)7月29日30日31日	5月・6月・7月	未定	事業部	
全国大会(95周年)	9月28日(日)	6月・7月・8月・9月	ロイヤルパインズホテル浦和	実行委員会	事業部
りんどう忌	(予)10月25日又は26日	7月・8月・9月	未定	事業部	
水明塾	(予)11月29日又は30日	8月・9月・10月	未定	事業部	

(注) 予定表の詳細未定については、月日・会場を変更することがあります。  
本行事予定表にない日帰り吟行会などについては別途に対応する。  
※「水明忌」は如月忌（秋子忌）・紗一忌、光二忌を統合した忌日。

## 令和7年主な兼題等応募句等募集について

募集行事名	誌上案内	応募用紙等	応募締切日	誌上掲載	主幹
新珠賞	11月・12月・1月	1月号	2月28日	5月号(六賞発表)	編集部
令和7年全国大会	7月・8月・9月	6月・7月	7月25日	9・10月合併号	編集部
水明競詠	6月・7月・8月	8月号	9月25日	12月号	編集部

## 令和7年その他の行事について

行事名・募集行事	日時	会場	備考
埼玉県現代俳句協会総会	3月8日(土)	さいたま文学館	
現代俳句協会総会	3月22日(土)	上野東天紅	
第47回埼玉俳句大会(埼玉現代俳句協会)	7月20日(日)	さいたま文学館	
現代俳句協会第62回全国大会			



## 水明例会および各地句会・教室のご案内

(令和7年1月1日)

句会名	日時	場所	指導・代表	幹事・連絡先 (自宅電話番号等)
第一例会	第1日曜 13時	浦和コミセン (パルコ・10F)	山本鬼之介	茂木和子 048-886-1860 小林京子 048-865-8158
第二例会	第3金曜 13時	本所ビッグシップ (東京・本所)	網野月を	山中みどり 03-3625-2435 青木鶴城 048-829-2776
第三例会	第1月曜 13時	京橋区民会館 (東京・京橋)	山本鬼之介	五明昇 048-858-7155 曲淵徹雄 048-864-4018
第四例会	第1木曜 13時	浦和コミセン (パルコ・10F)	山本鬼之介	石井喜恵 048-683-0801 反町修 048-683-9623
第五例会	第3火曜 13時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 0480-22-4011 河野はるみ 090-9008-6422
若松例会	第1土曜 13時	京橋区民館 (東京・京橋)	山本鬼之介	正木萬蝶 045-491-8773 石田慶子 03-3853-2048
関西例会	第3日曜 13時	守口文化(セ) (大阪・守口)	大橋廸代	森本早苗 078-583-6225
水明鬼石句会	第3水曜 13時30分	藤岡市鬼石公民館 (群馬・鬼石)	野口和子	野口和子 0274-52-3418
水明熊谷句会	第4火曜 13時	熊谷市立 コミセン	山本鬼之介	大塚茂子 048-596-1538 越田栄子 048-525-5835
雛の会	第2木曜 13時	水明発行所	石山かつ子	梅澤佐江 0480-22-4011
櫻蔭句会	第2水曜 9時30分	浦和コミセン (パルコ・10F)	丸山マスマ	阿部幸代 048-974-1704
野菊の会	第2水曜 13時	下落合公民館 (さいたま・中央区)	椎野美代子	下川光子 048-857-2120
芽吹句会	第3金曜 13時30分	浦和コミセン (パルコ・10F)	山本鬼之介	日高道を 090-2122-1223
柿の木塾	第3金曜 13時	水明発行所	勉強会	茂木和子 048-886-1860
歩の会	第1金曜 12時	水明発行所	勉強会	茂木和子 048-886-1860

句会名	日時	場所	指導・代表	幹事・連絡先 (自宅電話番号等)
りそな俳句会	第2火曜 18時	浦和コミセン (パルコ・10F)	星野和葉	池田雅夫 048-885-7276 日高道を 090-2122-1223
山茶花	第1水曜 10時	本太公民館 (さいたま・浦和区)	星野和葉	丸山マスマ 048-886-2447
襟の会	第3水曜 13時	常盤公民館 (さいたま・浦和区)	星野和葉	熊倉千重子 048-832-5455
珊瑚の会	第4木曜 13時	水明発行所	研究会	大村節代 048-862-9658
芙蓉句会	第3金曜 9時30分	六辻公民館 (さいたま・南区)	山本鬼之介	山戸美子 048-741-1669
たかなな 俳句会	第3木曜 13時	芝二丁目集会所 (埼玉・川口)	山本鬼之介	青木鶴城 048-829-2776
きざき サークル	第3水曜 13時	木崎自治会館 (さいたま・浦和区)	五明昇	森和子 048-832-6565
野ばらの会	第2水曜 13時	さいたま市民活動 サポーター(セ) (パルコ・9F)	星野和葉	緒方みき子 048-881-8643
皐月の会	第2金曜 13時	浦和コミセン (パルコ・10F)	山本鬼之介	皆川更穂 048-865-1824
青葉の会	第3月曜 13時	浦和コミセン (パルコ・10F)	山本鬼之介	梅澤輝翠 080-3357-5413
新樹の会	第4月曜 13時	浦和コミセン (パルコ・10F)	山本鬼之介	青木鶴城 048-829-2776
鶴川山百 合句会	第4火曜 13時	玉川学園コミセン (東京・町田)	町野広子	鈴木玲子 044-952-3643
ミモザの会	第2火曜 13時	アートフォーラム あざみ野(横浜)	勉強会	福田千春 045-901-6032
水明松本句会	第4週末	波多野寿子宅 (長野・松本)	波多野寿子	波多野寿子 0263-47-8937
若狭水明会	毎月20日	鳥羽公民館 (福井・若狭)	檜鼻ことは	鳥羽和風 0770-64-1211 鳥津初花 0770-64-1626
水明滯つ くし句会	第2土曜 13時	守口文化(セ) (大阪・守口)	寺内洋子	寺内洋子 090-3164-4923
和歌山水 明句会	第2木曜 13時	太田自治会館	大橋迪代	大橋迪代 073-471-5582 西浦千枝子 073-471-7929
神戸大池句会	第2火曜 13時	神戸市立北区 文化センター (神戸・北区)	勉強会	森本早苗 078-583-6225

句会名	日時	場所	指導・代表	幹事・連絡先 (自宅電話番号等)
りんどう 俳句会	第2木曜 13時	浦和コミセン (パルコ・10F)	山本鬼之介	染谷風子 048-685-2963 菅原卓郎 090-1405-7813
俳句の 手ほどき	第1・3水曜 13時	岩槻駅東口 コミセン	山本鬼之介	石山かつ子 048-757-2484
コクーンシティ 俳句教室	第2・4金曜 13時	コクーンシティ カルチャー (さいたま新都心)	境 延昭	五明 昇 048-858-7155 大熊健司 090-6718-5830
あゆみの会	第2・4木曜 13時	下 与 野 コ ミ セ ン	境 延昭	鈴木藻好 048-825-0158
蛸 蛸 の 会	第3月曜 13時	下 落 合 コ ミ セ ン	網野月を	岡田宣子 048-825-6502 横山礼子 048-831-8016
円卓の会	第3土曜 13時	浦和コミセン (パルコ・10F)	網野月を	青木鶴城 048-829-2776
繭 の 会	第1月曜 13時	浦和コミセン (パルコ・10F)	網野月を	小林京子 048-865-8158 綿引まりこ 048-873-5668
若 鮎 句 会	第2土曜 13時	浦和コミセン (パルコ・10F)	網野月を	持永喜夫 048-925-7605 本橋稀香 048-873-8871
めだか句会	第4土曜 13時	浦和コミセン (パルコ・10F)	網野月を	小田三茅 090-9687-1227 寺町知子 090-6560-6827
若 枝 句 会	第4木曜 13時	浦和仲町公民館	保坂翔太	椎名泰子 080-6726-6486 野口敏江 090-7463-1966
若 楠 句 会	第4火曜 13時	浦和コミセン (パルコ・10F)	青木鶴城	門真宏治 048-686-2600 小林京子 048-865-8158
小 梅 の 会	第4木曜 19時	不 定	日高道を	播磨 進 090-1251-6134

風 声

○現代俳句十月号——第一回現代俳句「風を詠む」欄

自称グルメとや高層の霧に住み

菊池ひろこ

遣されし友の歳時記ひらく秋

大塚茂子

サシバ舞ふ三千キロの旅途中

小駒さち子

日野富子北条政子龍田姫

近藤徹平

刈田道夕陽の中を下校生

反町 修

昼の退屈風吹きこぼす秋の蝶

茂木和子

臍の緒は桐の小箱に去ぬ燕

鳥羽和風

駅の名に魅かれ途中下車の秋

檜鼻ことは

魚板打つ音新涼の建仁寺

田寺玲子

○くぢら（中尾公彦主宰）十月号——「受贈俳誌美術館」欄

冷奴たつたひと言「おいしおす」

鬼之介

○こんちえると（関根道豊版元）九月号——「受贈誌紙お礼」欄

丸まると火蛾も地産か道の駅

鬼之介

赤提灯へ一番乗りの火取虫

五明 昇

被災地の子らにも同じ夏の空 日高道を

○こんちえると（関根道豊版元）十月号——「受贈誌紙お礼」欄

底紅や七十年を経たる櫛

鬼之介

つくづくと被爆の話夾竹桃

石山かつ子

八月十五日施餓鬼会へと安行坂

小倉倭子

○雪嶺（石本雪鬼主宰）十・十一・十二月号——「受贈誌」欄

慎ましく句碑を浮かせり芝桜

鬼之介

喫水深し母港へ急ぐ鯉船

々

○菜の花（伊藤政美主宰）十月号——「諸家近詠」欄

鳥唄はことばを紡ぎ夏の月

鬼之介

○鳩の子（柴田多鶴子主宰）十・十一月号

政元京治氏の「結社誌・総合誌を訪ねて」に

二上りやいま風鈴の本調子

鬼之介

二上りは、三味線の調弦法で二の糸を一音高く合わせる。

つまり、本調子の「ド・ファ・ド」を「ド・ソ・ド」に合わ

せる。高くしたことで、はでで陽気な気分や田舎風になる。どこからか、その三味の音が聞こえてきて、風鈴は軽やかな音を奏でている景が浮ぶ。とても涼しげな一句。

○白鳥（高松文月主宰）第七十三号——「受贈俳誌より」欄

山雨急まぢかねたるは秋田露

鬼之介

○雪華（橋本喜夫主宰）十月号

三品史紀氏の「厨の隅の俳句月評」（俳句総合誌を読む）

に

村の義理街の薄情雁帰る

保坂翔太

村と街、どちらの生活にも一長一短はある。それが顕著に現われるのが、人同士の繋がりが。村は人口も少なく何かしら皆で事にあたる。互いの義理人情の太い繋がりとというものがある。一方で町の暮らしは、ありとあらゆる物が揃い人も多く集まるが故の息苦しさ、他人に干渉されたく無いという人間関係の希薄さもある。掲句、村から街へ出

てった者、又は街から村へと移住した者たちが、思い描いていた生活とは違う事へのジレンマを抱えている。雁のように元の地へ帰ってしまえば、いっそ楽になるのでは？ というぼんやりした思いが季語に託されている様な感の一句だ。

○筈（山本一步主宰）十月号——「受贈誌の一句」欄

桐の花火の見櫓のある役場

新 曆文

（日高道を抄出）

### 水明発展基金御礼（敬称略）

—令和六年十月三十一日現在—

池田珪子	10	口	田中章嘉	15	口
佐々木史女	5	口	日吉重弥子	10	口
森本早苗	10	口	日高道を	10	口
			—合計60口—		

あけまして

おめでと

ございます

## 副主宰

今年「水明」が創刊九十五周年を迎える。嘗て「ホトトギス」の「婦人十句会」の幹事役を務めた創刊主宰の長谷川かな女師は、今でいう伝統俳句にその出自を有している。その関係性からかな女師は、伝統俳句いわばクラシック俳句を標榜して、クラシック俳句を尊んでいた。しかしながら、かな女師の生涯の作品を概観するにクラシック俳句を遥かに凌いでいて、今現在二十一世紀の俳句界においても色褪せるところがない。その個性の横溢は「水明」という巨大な城を築き上げるのに十分過ぎるものであった。

(網野月を)

## 事業部

年が改まり水明は創刊九十五周年を迎えます。これより周年行事に備えて準備をすすめて参ります。既に九月二十八日、ロイヤルパインズホテルにおいて全国大会及び懇親会が決定しておりますので是非のご予定をお願い致します。今も記念作品の募集を致します。俳句部門、評論部門、エッセイ部門にどしどしご応募ください。また、記念事業の一環として、発行所の備品の買い換えや電算化等事務関係の充実も図ります。例年の通り今年も新春俳句大会、水明忌、春の吟行会、水明夏行、りんどう忌、水明塾の行事を予定しています。皆様の積極的なご参加を期待しております。良い年にして参りましょう。

(青木鶴城)

## 総務部

水明九十五周年の記念すべき新春、皆さま恙無くお迎えの事とお慶び申し上げます。

総務部では日高道を部長以下、

菅原真理、岡田宣子、石井喜恵の

四名が在席しております。月曜

日から金曜日の午後十二時三十分より四時三十分まで一名ずつ交代で在室しております。仕事としては水明誌代、各行事申込みの集金を主軸に、水明誌の発送、投句された郵便物の処理等を行っております。

そして、会員皆さまの生活が俳句を通して楽しく充実することのお手伝いが出来ますよう、諸事全般について適切なお応えができること心掛けております。

どうぞ今後とも皆様様の指導と、ご理解ご協力をお願い申し上げます。

## 編集部

(石井喜恵)

水明の編集は、無事に水明誌を皆様にお届け出来ます様に、石山かつ子、大塚茂子、丸山マスキ、大村節代の四人が力を合せて行っています。今年もご協力の程、よろしくお願ひします。

(大村節代)

# 水明

令和七年一月号

通巻一一三二号

令和六年十二月二十日発行

## 発行所

水明俳句会

〒330-0064 さいたま市浦和区西町四一〇二二

電話 048-822-1474

## ホームページ

「水明俳句会」で検索

誌代 半年分 六、〇〇〇円

一年分 一二、〇〇〇円

同人費(誌代を含む)

一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費(誌代を含む)

一年分 三〇、〇〇〇円

振替〇〇一七〇一〇一九三九三

発行人 山本 鬼之介

印刷所 中央美版

# 令和7年「新春俳句大会」

## 参加申込書 〈申込締切1月20日(月)〉

新春俳句大会 1月31日(金)	会費 ¥1,000	出席します
-----------------	-----------	-------

※「出席します」を○で囲んでください。

※受付時間・投句締切時間をご確認下さい。

上記参加費を添えて申し込みます。

2025年1月 日

住所	〒		
氏名		電話	( )

(申込書送付先：〒330-0064 さいたま市浦和区岸町4-10-21)

水明俳句会

[緊急連絡先電話番号]

電話番号	( )
氏名	

※緊急時に備えて緊急連絡先電話番号をお届けください。

緊急時のみに使用し他の用途には使用いたしません。





きりりとりせん

# 季音 雪・月・花

三月号 一月二十五日締切

※雪・月・花の該当欄を赤丸で囲む事

氏名(併号)

## 題


最上部の枠から間を開けずに楷書で丁寧に書きください。

### (注意)

この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。

旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先(電話番号)

氏名(本名)

年齢

歳



**水  
明  
集**

**四  
月  
号 一  
月  
二  
十  
五  
日  
締  
切**

都・市・町名	氏 名 ( <small>排 号</small> )
都市町	

最上部の枠から間を開けずに楷書で丁寧にお書きください。


**(注  
意)**

この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を  
使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作つて  
使用して下さい。

旧仮名つかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先（電話番号）

氏名（本名）

年齢

歳



山紫集

四月号 一月二十五日締切

氏名(併号)

四月の兼題

「齒 朶」(傍題可)

投句対象者 同人及び季音同人「花欄」「月欄」


※最上部の枠から間を開けずに楷書でお書きください。

(注意) この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を

使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って  
使用して下さい。

旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先(電話番号)

氏名(本名)

年齢

歳



季音抄

山本鬼之介

ひつそりと城下を落つる鮎の影  
自販機の喋り上手やうそ寒し  
プリーツスカート秋風たたみては放つ  
実椿や先人句碑の前うしろ  
冷えびえと富士の樹海の闇深し  
雁の棹一番星を越えゆけり  
恋をしへ鳥舞のつやめく潦  
菊膾藍の器を揃へたる  
冷やかや曜変放つ瑠璃の艶  
秋寒し人体模型の手と脚と  
小鳥来る人には見えぬ空の路  
古びゆく十の塔婆や秋の風  
生きては般若死して観音白芙蓉  
小鳥来る枝に庭師の豆絞り  
桔梗咲く寺SLの大汽笛  
溪を這ふ黒部の瀬鳴鬼胡桃  
穴まどひ土蔵のひびり深まりぬ  
高樓を燃やすが如く夕紅葉

五明 昇  
境 延昭  
椎野美代子  
島津初花  
鈴木康世  
十倉和子  
梅澤佐江  
森川義子  
大場順子  
丸山マシミ  
荒井俱子  
松宮保人  
染谷風子  
笹本啓子  
保坂翔太  
曲淵徹雄  
下川光子  
河野はるみ

今月のはてな？

筮(ぜい)

末枯(うらがれ)

唳唳(りようりよう)

瀬鳴(せなり)

総(ふさ)やか

罅(は)ぜる

肌(はだえ)

溢(こぼ)す

趾指(あしゆび)

水明発行所受付時間

(048-822-4741)

曜日：

(月・火・水・木・金)

時間：12時半～午後4時半

(土・日・祭日は休み)

水明の行事と重なった時は休み

(上記の時間には係がおりますので、

ご用の方は 時間内にお願ひします。)

# 水 明 抄

山本鬼之介

村里に秋の灯ひとつまた一つ  
 秋澄むや枯山水の礫の波  
 棟上げの檜の五寸金糸草  
 秋の蝶砂丘の空へ吹かれ行く  
 坂道を下れば秋の日本海  
 延べ段の影を拾うて白桔梗  
 ぬくもりの恋しき腕霧の古都  
 こざつぱりと古暖簾そよぎ処暑の風  
 味噌蔵の裸電球法師蟬  
 宿坊の夜明けは早し霧襖  
 献灯のほむら掻き消す黍嵐  
 秋の昼日の絡み合ふ奥座敷  
 秋雨や夜のマイセン置時計  
 竹輪麩のやうな女と酌む新酒  
 新涼や夜をあやなすプレリユード  
 毬栗を踏み込み胸の底の澱  
 突出しは里芋と烏賊老女将  
 葡萄の実五つ並べて水彩画

反町 修  
 岡田 宣子  
 飯田 忠男  
 小林 京子  
 菅原 真理  
 清水 桂子  
 霜多 光代  
 寺町 知子  
 池田 珪子  
 篠崎 紀子  
 菅原 卓郎  
 皆川 更穂  
 阿部 幸代  
 森下 山菜  
 丸屋 詠子  
 遠藤 人美  
 新 曆文  
 畑宮 栄子

水明例会案内	句会名	日 時	会 場	指 導 者	幹 事
	第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	茂木和子 小林京子
	第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中みどり 青木鶴城
	第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五曲 昇雄 明淵 徹
	第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	石井喜恵 反町 修
	第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
	若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木萬蝶 石田慶子
	関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化(セ)	大橋勉代	森本早苗

水 明

令和六年十二月二十日発行 毎月一日発行

(第九十八巻 第一号)

定価 一〇〇〇円